

Liberation.org (解放)

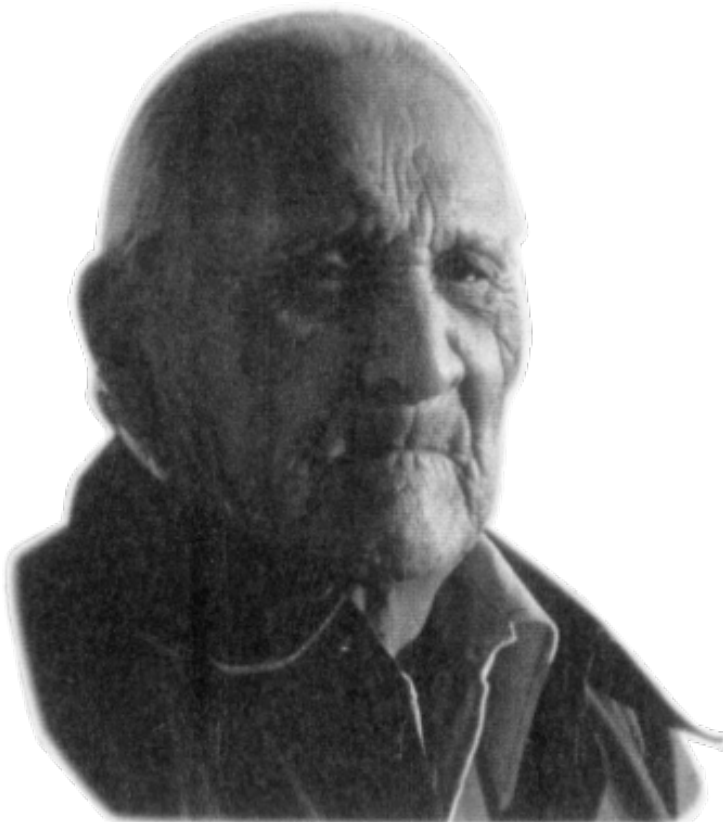
このウェブサイトの原文は英語です。この翻訳を作成するためにDeepLを使用しました。翻訳が部分的に間違っていると思われる場合は、コメントを電子メールで までお送りください。

(with my gratitude) to translations@liberation.org. 翻訳エンジンは、この.PDFのラコタ語の単語に苦勞しました。正しい形はウェブサイトをご覧ください。

奇妙な紆余曲折を経ながらも、この後に続くのは解放についての物語である。

はじめに

1974年、私はフランク・フルズ・クロウという年老いたスー・インディアンの聖人に会うという、願ってもない幸運に恵まれた、



フランク・フルズ・クロウは、サウスダコタ州のパインリッジ・インディアン居留地にある彼のキャビンに私を招待してくれた。フランク・フルズ・クロウはスー族のセレモニアル・チーフだった。彼は私を孫として受け入れてくれ、私はその賢い老人からできるだけ多くのことを学ぶことを使命とした。他にも何人かのメディスン・ピープルや部族の長老たちに会い、私が信じて育ってきた科学的に定義された現実の本質を覆すようなことをたくさん目撃した。このような現実を変える奇跡

の体験も素晴らしかったが、私は、祈りをもって奇跡をもたらしたメディスンピープルの謙虚さにさらに驚かされた。謙虚さが大きければ大きいほど、聖なる人々を通して流れる力も大きくなることがすぐにわかった。謙虚さが鍵なのだ！

それ以来私は、スー族のメディスンピープルの中で経験したこと、そして彼らの多くの賢明な教え（言葉によるもの、言葉以外のもの）を、科学的理論（）、西洋と東洋の知恵の伝統と調和させることに何年も費やしてきた。

私の奇妙な物語は、「魔法使いの小銭入れ」と題された章から始まる。この章では、私がフランク・フルズ・クロウ酋長と出会うきっかけとなった極めて奇妙な出来事、そして保護区での冒険、ラコタの長老たちやメディスン・ピープルが親切にも惜しみなく教えてくれた教え、そして最後に、これらの教えが西洋の科学的理解や宗教的教えとどのように調和し、おそらく個人的にも集団的にも私たちの解放につながるのかについて述べる。

目次

はじめに

目次

魔法使いの小銭入れ

サイキック・フレンド エド

魔法使いの小銭入れのテスト

エドに会いに行く

エドが消える

靈感がどのように獲得されるかを記録する

読む価値のある本

エドと私はネイティブ・アメリカンの教師のために祈る

フランク・フルズ・クロウに会う

パインリッジ居留地へのヒッチハイク

ファースト・ビジョン・クエスト

セロ・ブラッククロウズ・キャンプ・ラコタでのサンダンス（1975年

第1回ロウアピ（薬の儀式）

パイプストン訪問

グアテマラ

ドーソンに馬はいない

ハイホース・ファミリー、サンダンス準備に協力

カラス犬の楽園でのサンダンス

ドーソンのYuwípiセレモニー

霊の顔に触れる

バッファローズスピリット来訪

最も記憶に残る肉の捧げもの

1977年のポーキュパイン・サンダンス

ロバート・ステッドの『Lowál_14B↔pi』におけるゴースト・ダンス

黄色いパネルバン

ラピッドシティでのパウワウ。

おじいちゃん、条約会議に行く

おじいちゃんとダライ・ラマに会う

祖父は私を見つめ、私を通して見る

ドーソンは私を "Pǎ" と名付けた

祖父は私をナウ・ウィジピと名付ける

おじいちゃん、脳卒中のドーソンを癒す

ピート・スウィフト・バード

ドイツの医学者

アイ・ダンス・イン・1978

イエスが再び来られるとき

たった5人のYuwípi

特別に長い名前を持つスピリット

ピート・スウィフト・バードがスティーブ・ローレンスを知っているか尋ねる

インファマス・ブラフのスティーブズ・ハブレチェーヤ

サンダンス・ヘルパーのゲータレード

スティーブは霊と交信している

必要なかった薬師祭

メディスン・ピープルからの教え

どのように信じるか

車輪の上のスポーク

科学の棘

6人の盲人が象に出会う

ホロー・ボーンズ

世界最悪の人物

他人の宗教を批判しない

最悪の敵

分析

理由と正当性

最悪の敵との戦い - 北極星

確証バイアス

橋の作り方

生存動機の進化

食べる、動く、繁殖する

領土を守る

社会的動機と領土的動機の融合

潜在的な領土的動機

自らの中にある領土的動機と向き合う

サバイバル - 究極の倫理的要請

進化の機能としての倫理

アブラハム・マズローの欲求階層説

すべて、私の関係者たちよ

フードチェーンへの依存

言葉の果実

言葉の果実 - 原罪

宗教テキストの社会学的意図

社会化尺度

二つの黄金律、そして低次と高次の倫理の物語

倫理理解の再定義の必要性

一見不可能に見える倫理的挑戦

謙遜への険しい道

イクチェ・ウィチュハシャとイクチェ・ウィルヤ（単純な男と単純な女）

問題点

我々の見方は常に主観的である

義のパラドックス

機械（それは私たちである）に「NO!」と言い、その支配プログラムから自らを解放する

砂漠」を理解し、それを克服する方法

最高の幸福と最高の喜び

欲望の機能

欲望の重荷

プレゼント

平和への挑戦 - グローバルなポトラッチ？

足りていることを知っている人は豊かだ。

絶望

自殺 - 健康的な方法

丘の上に行くための教え

4つのことを期待する

彼らに "NO!

5分間

アイデア、理解、描写、言葉の奥にある現実

注意を払う

量子力学的説明

著作権

魔法使いの小銭入れ

私の冒険は21歳の誕生日に始まった。セントルイス大学で哲学と心理学を専攻していた私は、潜在意識（ユングでいうところの無意識）に魅了されていた。心理学者のカール・ロジャーズは、カウンセリングにおいて、各人が自分の自由に使える道具を使ってできる最善のことをしていると見なし、それゆえに患者に対して**無条件の肯定的な評価**を維持するというアプローチをとっていた。私は、自分自身の恥ずべき部分を明らかにし、罪悪感から自分を責める必要がないと感じられるように、同じように寛容、受容、肯定的な評価で自分自身を吟味するようインスピレーションを受けた。

私は、自分の潜在意識が他の誰よりも著しく暗くも恐ろしくもないと信じていたし、隠された部分に立ち向かい、それが私個人の人間性の一部であり、他の誰もが持つ潜在意識の人間性とほとんど同じである以上、何を発見しても許す力があると信じていた。

この意図と態度がスピリチュアル・ジャーニーに不可欠な要素であることを、私は後に学んだ。私たちの潜在意識は、自分では気づかないところで私たちの行動に影響を及ぼしているのです。自分自身を完全にコントロールするためには、自分自身の隠れた部分に気づき、受け入れ、赦しの光を当てることが不可欠となり、不完全な人間性（他のみんなと同じ！）を受け継いできた自分自身を理解し、赦すことで、深い断罪の感覚を生み出すことができる。

その頃、私は科学ほど信じているものはないと思っていた。[夜中にぶつかるもの.....](#)」には科学的な説明があることを、私は絶対的な確信をもって知っていた。科学の優位性に対するその確信は、私の人生における大きな慰めと安心の源だった。私は心霊現象や魔法、奇跡、あるいは科学の単純な理解では説明できないようなことは信じなかった。エписコパリア教徒として育った私は、敵を愛するというイエスの教えや、その他多くの賢明な教えを賞賛し、尊敬していたが、描かれている奇跡は信仰による癒し、伝説、神話だと思い込んでいた。神については、

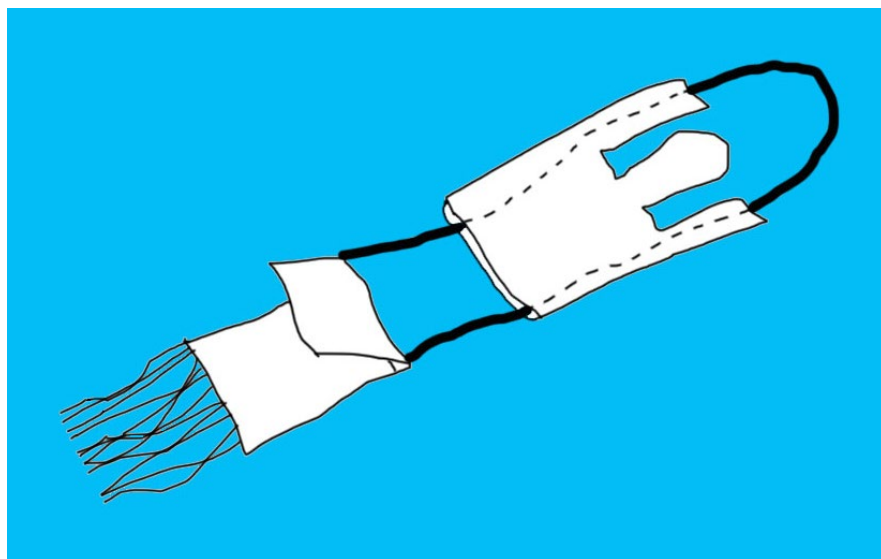
神が存在するとは完全には信じていなかったし、神が存在しないと完全に確信することもできなかった。私は自分の不確かさに満足していた。

サイキック・フレンド エド

私の友人グループの中に、エドという大柄で岩のような顎の男がいた。プリンストン大学で心理学を専攻していたエドは、並外れた速読家だった。プリンストン大学在学中、彼はたいてい図書館に行き、心理学や興味のあるテーマに関する本を3、4冊手に取り、図書館で読むか、借りてきて自分の部屋で読み、また次の日に返すということを繰り返していた。エドは聡明で、並外れて読書家だった。エドの心理学に対する深い理解は、私が一時期直面した個人的な危機の際に私を助けてくれた（このことについては後で詳しく述べる）。

エドはまた、超能力があると言っていた。パーティーや集まりの席で、エドはよく靈感や魔法、魔女のお守り、パワー・オブジェ、そして私なら偶然としか思えないような不思議な出来事の話の話を披露してくれた。私はエドに、彼の荒唐無稽な話を信じていないと言う必要を感じなかった。なぜなら、エドは謙虚で、気さくで、社交的だったので、私は不信感を抱くことなく、彼の話をもとに受けることなく、想像力豊かな娯楽として楽しむことができたからだ。

私の21歳の誕生日に、メアリー・ベスという親しい友人がナイジェリア起源の彫刻が施された革の小銭入れをプレゼントしてくれた。彼女はお店でそれを見て、私へのプレゼントにいいと思ったのだ。それは



その小銭入れには、首にかけるととても重い革のひもがついていた。そのひもが重かったので、誰も駆け寄って財布をひったくり、強く引っ張ってひもが切れることはなかった。ひもが何か引っかかって、私の頭が引きちぎられるところだった) 上部には2本の空洞の

腕があり、そこにひもが通って下部とつながっていた。上部はまた、2本の腕の間に頭と舌の形をしていた。下部にはポケットを覆うフラップがあり、フリンジが底までつながっていた。小銭入れの本体は色鮮やかな革のデザインで飾られていた。小銭入れのデザインはどれも明るくカラフルだったが、小銭入れの全体的な外観と私の記憶は、予想外に、そして不可解なほど暗かった。

その小銭入れを首から下げ始めてから、徐々にその小銭入れに関連した効果を感じ始めた。咳が出るようになり、深い倦怠感に襲われた。健康と生命エネルギーが低下しているように感じた。その頃、私はセントルイス大学のキャンパス近くの高層アパートで車庫係の仕事をしていた。駐車場が見渡せる窓のある部屋に座り、私がいることで荒らしや泥棒を遠ざけることができた。最低賃金をもらって、ひとりで座って勉強するのだから、大学生の仕事としては完璧だった。

魔法使いの小銭入れのテスト

勉強が一段落したある夜、私はガレージで退屈になり、小銭入れを調べ始めた。私はエドの魔女のお守りやパワー・オブジェの話を出し、この小銭入れは魔女のお医者さんが作ったのではないかと考え始めた。私はその考えを面白がり、ユーモラスな仮説を検証する方法を考えた。デビーというとても可愛い女の子から、首にかけるための細いチェーンについた小さな十字架のメダルをもらった

。その十字架は私にとって宗教的に大きな意味はなかったが、デビーは信じられないほどかわいかったので、私はそれを身に着けていた。その十字架を小銭入れに入れて閉じ、テーブルの上に置くと、ハリウッドの脚本を想像したように、小銭入れが飛び跳ね、くすぶり、煙に包まれ、最後には炎に包まれ、実体のない声が「NOOOO」と叫ぶと思った！アーーーーッ！"小銭入れはすぐに灰になり、十字架は灰の上でホバリングしながら光り、脈打ち、音を立てている。もちろん、このようなことが実際に起こるとは思っていなかったが、私は自分自身を面白がっていた。そこで私は小銭入れを開け、十字架をその中に入れ、指2、3本でそっと閉じようとしたとき、重い革のひもが切れた！突然、私は少しも面白くなかった。パニックに陥ったのだ。心理学を学んでいる私は、無意識のうちに強く引っ張ってしまったのではないかと思った。Tバックを四角く結んでみたが、結び目を強くすると、Tバックは別の場所で切れた。さらに何度か結び直してみたが、そっと締め直すたびにまた切れてしまう。まるで重い革紐が一瞬にして劣化してしまったかのようだった。私の安心と安らぎの源であった科学的根拠に基づく世界観が狂わされ、地に足がつかないパニックに陥っていた。

エドに会いに行く

私はエドが夜更かしをすることを知っていたので、シフトが終わると彼のアパートに行った。コートのポケットに小銭入れを入れ、エドに見られないようにフラップを閉じた。彼のベルを鳴らし、親しげに訪問し、しばらくしてから小銭入れを取り出して、"ところで、これってどう思う？"と言うつもりだった。エドは3階建てのアパートの2階に住んでいた。私が彼のベルを鳴らすと、彼は階段を下りてきて私を中に入れてくれた。私はびくびくしながらも無理に満面の笑みを浮かべ、エドは玄関のドアを開けた。エドは「プレストン！」と言って一瞬笑顔を返したが、私が何か言う前に、彼の表情は恐怖の表情に変わり、私はニヤリと笑ってアイコンタクトを保とうとしていたが、彼は小銭入れの入った私のポケットを見えないように見下ろしており、恐怖に怯えているようだった。私が小銭入れを取り出すと、エドは両手を上げて飛び退いた。彼は言った。"私はあなたの周りに死

を見た。それに対する私の反応は、科学的根拠に基づく現実という概念を握りしめていた私のグリップが緩み、意味不明な声だった。私は小銭入れが死をもたらすかもしれないとか、私の命を脅かすかもしれないとか、そういうことを恐れていたのではない。現実を科学的に理解する方法が、私が経験していることを説明するには不十分であることに恐怖を感じていたのだ。

エドは私を彼のアパートに招き、この小銭入れを作った人物を呼んで、その小銭入れについて調べようと提案した。私は言った。「もしこれが死だとしたら、なぜ作り手を呼ぶ必要があるんだ？エドは、私が窓から飛び降りてを傷つけたりしない限り、完全に安全だと断言した。彼は、小銭入れの色はどれも明るく鮮やかであるにもかかわらず、全体的な様相が不可解なほど暗いことを指摘した。エドは直径2インチの大きなキャンドルを4本手に取り、火をつけて、広葉樹の床に2フィート幅の正方形に並べた。真ん中に小銭入れを置き、部屋の明かりを消して、私たちを正方形の両側に座らせた。エドは、私の思考を消して、誰がこの財布を作ったのかを想像力で感じ取るように言った。しばらくして、たぶん1分か2分くらいすると、4本のキャンドルがシンクロして光り始めた。センチほど開いた窓があり、ベネチアンブラインドが敷居に垂れ下がっていた。ベネチアンブラインドが窓にぶつかり始め、アパートの温度が20度下がったように感じた。肌寒く感じ、部屋にはとても不快な気配が漂っていた。しかし、ろうそくの光も、窓のブラインドを叩く音も、気温の低下も想像していなかった。私は言った。この状況を打破できる？」と私は言った。エドが言った。イエスやブツダを思い浮かべて、彼らの愛を押し込むんだ。そうすることで、祓うことができる」。エドはリズムカルに呼吸を始め、"気"を集中させているのだと説明した。部屋は暖まり、キャンドルの光は止み、ベネチアンブラインドの音は止み、恐ろしい気配は消えた。

エドが消える

小銭入れを片付け、エドと私はその夜数時間話をした。彼は大きなキャンドルを2本手に取り、再び火をつけ、3フィートほど離して床に置いた。彼は部屋の明かり

を消し、私たちはキャンドルを挟んで右と左に向かい合うように座った。エドは言った。何も考えるな。心を静めて、ただ私を見ていなさい」。

薄暗いテキストのページを見ているとき、頭がぼんやりしていると、テキストのページがグレイアウトして見える現象がある。瞬きをして焦点を合わせると、またはっきりと文字が見える。私がそこに座ってエドを見ていると、彼はグレイアウトした！彼の周りはずべて見えていたのに、彼はグレイアウトしていたのだ。まばたきをして焦点を合わせると、またエドが見えた。私はまばたきをして、彼はグレイアウトした。私は言った！と言うと、彼は遮って言った。僕は消えるんだ。

これらの体験は、"夜中にぶつかるもの"はすべて科学で説明できると信じていた私の単純な信念に終止符を打つものだった。一方では、私は危機的状況に陥り、自分の現実の基礎となる信念が崩れ去るような大きな恐怖を感じた。(天使が羊飼いたちに現れたとき、彼らが最初に言った言葉が「恐れるな！」だった理由がわかった)。一方、中国語の"危機"には"チャンス"という意味もある。私が哲学と心理学を専攻していたのは、存在についてのより深い真理と、潜在意識の深層を含む自分自身についてのより深い真理（）を理解したかったからだ。単純化されすぎた科学的理解を手放したとき、私の考え方ではそれが不十分であることが決定的に示され、私はさらに深い謎と潜在的な知識の機会へと自らを開いたのである。

その夜以来、私はエドともっと親しくなった。私たちは3ベッドルームのアパートに引っ越し、エドと私をつないでくれた小銭入れをプレゼントしてくれた友人、メアリー・ベスと同居することになった。

エドと私は、心霊現象を探求する冒険に何度も出かけた。時折、私たちはワシントン大学（セントルイス）の学生たちと社交的に遊んでいた。彼らがエドに何に夢中になっているのか尋ねると、彼は見せてあげると言い、そのうちの一人に何も考えずにエドを見るように言った。分ほどすると、その学生はエドが消えてし

まったと叫んだ。他の生徒が「次は僕をやって！」と言うと、エドは順番にそれぞれの生徒の姿を消していった。

靈感がどのように獲得されるかを記録する

エドとの数々の冒険の中で、私が最も魅了されたのは、エドの靈感のような能力を人がどのように（そしてもしそうなら）身につけることができるのかを見極めようとする事だった。私は、自分自身がそのような能力を身につけることよりも人がどのようにしてそのような難解な能力を身につけることができるのかを学び、記録することに興味があった。(深く神秘的な真実を探求し、それを記録することは私の情熱であり、この文章とウェブサイトを作成した理由の一部でもある。多くの人が、このような超能力的な知覚は、人が持っているか、一生持つことのない能力だと推測しているが、私はその評価に同意しない。なぜなら、ほとんどの人は自分のエゴに強く縛られていて、知覚の扉を手放し、開くことができないからだ。しかし、エゴを取り払い、自分自身を開放する方法は（痛みを伴いながらも）あると私は信じている。

読む価値のある本

心霊探検を行う一方で、私たちは神秘を貫き、理解することに近づくための文献も研究した。ジア・フー・フェン (Gia-Fu Feng) とジェーン・イングリッシュ (Jane English) の『Tao Te Ching (道経)』と、トーマス・マートン (Thomas Merton) の『The Way Of Chuang Tzu (荘子の道)』である。(私はこの2つの道教のテキストを、人間のエゴを解体するプロセスを概説する、信じられないほど効果的なマニュアルとして見るようになった)。科学しか信じていなかった時期でさえ、道教の教えの叡智を高く評価していた。

エドはセーレン・キルケゴールの『恐怖とおののき』と『死に至る病』の2つのエッセイを収録した本を強く勧めた。エドは、精神的な革命を起こさずに、この2つのエッセイのすべての言葉を読んで完全に理解することは不可能だと信じていた

。私は、キルケゴールのエッセイがエドの靈的知覚を開いたのではないかと疑っていたが、彼に尋ねたことはなかった。

それまでに出版されたカルロス・カステニェーダの4冊の本を読んだ。その4冊の中で最も優れていたのは、3番目の『イクストランへの旅』だった：ドン・ファンの『教え』と『力の物語』である。1冊目と2冊目では、カステニェーダはドン・ファンが教えてくれたことの深さをまだ理解していなかった。第3巻では、カステニェーダは、第1巻と第2巻を執筆した時点ではその重要性が理解できず、含まれていなかった、以前の教えを遡り、再話する。ドン・ファンの教えは第4巻でクライマックスを迎え、完結する。

もう一冊、マーティン・ベルの『The Way Of The Wolf』も特筆に値すると思う。バリントン・バニー』、『風がタジールに言ったこと』、『名前はどうでもいいヤマアラシ』の短編と、『麦とタマネギ』、『逆質問』、『ラグ・タグ・アーミー』のエッセイからなるこの本は、神秘主義的キリスト教の奥深さと力強さを物語っている。このリストの最後に私が読んだ本で、今日の苛烈な政治情勢に特に関連しているのは、カール・ユングの『未発見の自己』である。(お薦めです！)

。

エドと私はネイティブ・アメリカンの教師のために祈る

私たちはまた、アメリカン・インディアンの知恵についても読んだ。あるとき、エドと私は、ネイティブ・アメリカンがこの地域固有のスピリチュアルな知識と最も強力なつながりを持っているという結論に達した。私たちは、どのように先生を探して見つけるのか、まったく見当がつかなかった。たとえばイエローページでメディスン・マンを探したとしても、本当にパワフルなメディスン・マンやメディスン・ウーマンは自分の能力を宣伝したり商品化したりしないので、探す価値がないことはわかっていた。エドが提案したのは、メディスン・パーソンやメディスン・パワーがどうにかして私たちのところに来てくれるように、宇宙に祈りの意図や願いをすることだった。私たちは祈りを捧げ、もしそれが創造主や道や宇宙の意志であるならば、ネイティブ・アメリカンの先生のところに導いてくれるようにとお願いした。


数日後、図書館を歩いていると、ある本の背表紙のデザインや形が目にとまり、私はその本を本棚から取り出した。ダストジャケットの表紙には、小銭入れの彫刻を思い出させるビーズ細工のデザインが施されていた。その本は、ジョセフ・エペス・ブラウンの『The Sacred Pipe (聖なるパイプ)』というハードカバーの本だった。ブラック・エルクというオグララ・スーのメディスン・マンが、ホワイト・バッファローの子牛の女がスー族に聖なるパイプをもたらした経緯と、そのパイプにまつわるスー族の7つの儀式について述べている。

私はその本を借りてアパートに持ち帰り、エドに見せた。彼は45分ほどで読んで、とても感動していた。私も2、3日で読んで、とても感銘を受けた。(数日後、私はワシントン大学(セントルイス)で人類学を専攻していたベイカーという友人と電話で話していた。彼は私に、ジョン・ネイハートの『ブラックエルクは語る』という本をチェックすべきだと言った。それから彼は、"フランク・フルズ・クロウというオグララ・スーのメディスン・マンが、数週間後にワシントン大学に来るって知ってる?"と聞いてきた。私はこの朗報を知らなかったなので、彼に礼を言った。私は翌日、フルズ・クロウ酋長の来訪について詳しく知るためにワシントン大学に行った。

AT WASHINGTON UNIVERSITY
NOV. 20-22, 1974

OGALALA SIOUX MEDICINE MAN
FRANK FOOLS CROW

with
Matthew King
Interpreter



and
Don Clowser
Historian

Lectures and Slides on Sioux History , Medicine , and Life.

Nov. 20; Wed;	2:00 pm - 4:00 pm	Brown Hall
	8:00 pm - 10:00 pm	Graham Chapel
Nov. 21; Thurs;	11:30 am - 1:00 pm	Wohl Center Cafeteria
	7:30 pm - 9:30 pm	Wohl Center Formal Lounge
Nov. 22; Friday;	11:30 am - 1:00 pm	Lower Level Mallinckrodt Center
	2:30 pm - 4:30 pm	Rooms 303, 304 Mallinckrodt Center

ALL ARE FREE AND OPEN TO THE PUBLIC

Sponsored by:
SOUTH-40 COMMUNITY COUNCIL
ACADEMIC COMMITTEE
MALLINCKRODT PROGRAMMING BOARD
THE HARRY FREUND MEMORIAL FOUNDATION

このポスターにはこう書かれている：
ワシントン大学にて
1974年11月20～22日
オガララ・シュー・メディスン・マン
かんあ
マシュー・キング通訳付き
ダン・クラウザー
スー族の歴史、医学、生活についての
講義とスライド。
11月20日; 水; 午後2:00 - 午後4:00 ブラ
ウンホール
午後8:00 - 午後10:00 グラハム・チャペ
ル
11月21日; 木; 午前11:30 - 午後1:00 ウォ
ール・センター・カフェテリア
午後7時30分 - 午後9時30分 ウォール・
センター・フォーマルラウンジ
11月22日; 金; 午前11:30 - 午後1:00 下層
階 マリンクロッド・センター
午後2時30分～午後4時30分 303号室、
304号室 マリンクロッド・センター
すべて無料で一般公開
スポンサードリンク
南40コミュニティ協議会
学術委員会
マリンクロッド・プログラミング・ボ
ード
ハリー・フロイント記念財団

私はその訪問を担当する事務所を見つけ、彼の訪問のポスターをもらった。フラン
ク・フールズ・クロウの写真が見つからず、フランク・フールズ・クロウとは
似ても似つかない南西部のインディアンの絵で代用したとのことだった。私はそ
のポスターを喜んで受け取った！

フランク・フールズ・クロウに会う

フランク・フールズ・クロウがワシントン大学に来ることをエドに話したとき、
彼は私と同じように、これが私たちの祈りの成就になるかもしれないと興奮し、

希望を抱いていた。その頃、私は竹でフルートを作っていたので、作った中で一番いいフルートをきれいな白いシャツに包み、フランク・フルズ・クロウにプレゼントするつもりで最初の講演に持って行った。エドは仕事で、最初のトークには出席できなかった。私は1時間半ほど早くワシントン大学のブラウン・ホールに到着し（興奮していた！）、誰もいない講堂の最前列中央に座って待った。講演の時間が近づくとつれ、客席が埋まり始め、8列ほど後ろの通路に、私に十字架をくれた可愛い女の子、デビーが座っているのが見えた。しばらく彼女に会っていませんでしたので、講演の後、彼女とつながってみようと思った。

フルズ・クロウ酋長は、通訳のマシュー・キングというラコタ族の男性と、ダン・クロウザーという歴史家とともにやってきた。講演が終わり、私は立ち上がってデビーがどこへ行こうとしているのか振り返ると、フルズ・クロウ酋長が私のすぐそばまで歩いてきて、握手をしようと右手を差し伸べていた。私は彼と握手し、フルートとシャツの束を渡した。

回目の講演は夜の8時からだったので、エドも参加することができた。ワシントン大学のキャンパス内にあるグラハム・チャペルで行われた。チャペルといっても、礼拝堂というよりは小さな大聖堂のような感じだった。

フルズ・クロウ酋長は礼拝堂の前において、私を見て、上に来るように合図した。私が近づくと、彼は右腕を伸ばし、手のひらを上に向け、袖を引いて、伸ばした右前腕を叩き、押し始めた。そうすると、手首の皮膚の下にしこりができ、おそらく手首の皮膚の下に大きなビー玉があるように見えた。私はそれを見て口をあぐりと開けていたと思う。そして手首を反対方向にブラッシングすると、しこりは消え、彼は笑った。マシュー・キングによると、フルズ・クロウ酋長の体内にはヒーリングに使う7つの聖石があり、そのうちのひとつを私に見せてくれたのだという。その日の夜、エドは私に、フルズ・クロウ酋長はとてもパワフルで、そのあまりのパワーと輝きに、エドは彼を見ることさえできなかったと言った。エドは、フルズ・クロウ酋長は地球上で最もスピリチュアルなパワーのある人間かもしれないと思うと言った。

私は次の4つの講演に参加した。講演の中で、フールズクロウ酋長は、私たちは常に自分自身の最大の敵であり、スピリチュアルな道とは、自分自身という最大の敵と戦うことを学ぶことである、と語った。マシュー・キングは、フールズ・クロウ酋長がラコタ族に最も頻繁に伝えていた教えはこれだと教えてくれた。それ以来、私は、究極で最も深い真理へと私たちを向かわせる手段として、その教えが私たち人間にとって極めて重要であることを理解するようになった。

メディスン・メンは空洞の骨のようなもので、私たちが（エゴの欲望で）満たされているところ、彼らは空っぽで、空っぽだからこそ、創造主の聖霊が彼らを通して人々を癒すことができるのです。

フールズ・クロウ酋長が与えた3つ目の教えは、世界で最悪の人物を考えた場合、もしその人物の代わりに生まれ、その人物の経験とともに育っていたとしても、自分たちが違う結果になったかどうかはわからない、というものだった。

マシュー・キングは、フールズ・クロウ酋長は何が起こるかを知っていることがある、と語った。フールズクロウ酋長は、多くの死と破壊が起こる時が来ると言った。他の誰かが、これから起こる死と破壊に対して私たちは何をすべきかと尋ねた。フールズクロウ酋長は、祈るべきだと答えた。また別の人が、どのように祈るべきかと尋ねた。マシュー・キングがこの質問をフールズ・クロウ酋長に訳し、フールズ・クロウ酋長がその答えをラコタ語でマシュー・キングに答えている間、私はフールズ・クロウ酋長がセイクリッド・パイプを使った祈り方を教えてくれるのかと思った。代わりにマシュー・キングは、**"However you believe; Pray that way!"**と訳した。

4つ目の教えは、他人がどのように祈っているのか、決して質問したり批判したりすべきではないというものだ。それはその人と創造主との問題だからだ。もし私たちが間違っていると思う祈りや礼拝を見たら、黙って立ち去り、何も言うべきではない。

チーフ・フールズ・クロウとマシュー・キングは、エドとメアリー・ベスと私のアパートを実際に訪れ、エドも私も、先住民のスピリチュアルな導きを求めて捧げた祈りが成就したと受け止めた。フールズ・クロウ酋長は私に根の一部を渡し、それをバックスキンに包んで生皮の紐で首に巻くように言った。そして後日エドから、私が作ったメディスン・バッグは、私たちを引き合わせた小銭入れと同じくらい強力だったが、小銭入れのエネルギーがマイナスであったのに対し、メディスン・バッグのスピリチュアルなエネルギーはプラスであったと聞かされた。マシュー・キングとフールズ・クロウ酋長と話しているうちに、フールズ・クロウ酋長がサウスダコタ州のパインリッジ・インディアン居留地のカイル郊外にある彼の小屋に泊まりに来ないかと誘ってくれた。

パインリッジ居留地へのヒッチハイク

1974年11月下旬、私はチーフ・フールズ・クロウに出会い、1975年1月6日、セントルイスからパインリッジ居留地までヒッチハイクを始めた。親指を突き出して5分もしないうちに、私は初めて車に乗った。運転手は中年で、気さくな人だった。彼が笑うと、フールズクロウ酋長の笑い声にそっくりだったのがショックだった。私はそれがフールズクロウ酋長が私の旅を導いてくれているという意味かもしれないと期待したが、単なる偶然か気のせいかもしれないとも思った。セントルイスから州間高速道路70号線を西に向かうと、私は次々と車に乗った。この一連の乗り物の最後はレストランに立ち寄り、大きくてかなりおいしいチーズバーガーをおごってくれた。そのあと20分から30分ほどは次の車に乗れなかったが、その間、私は創造主に感謝の祈りを捧げた。やがて一台の車が停まった。それはとても大きなキャデラックで、フラットトップのクルーカットの大柄なバーレー男が運転していた。彼は私を"ボーイ"と呼び、私は彼を"サー"と呼んだ。

私は立ち止まってくれたことに丁重にお礼を言い、どこに向かっているのかを告げると、彼はハイウェイ13に向かっている、南に向かう前に立ち寄って夕食をおごってくれると言った。私は大きなチーズバーガーを食べただけだったので、夕食の申し出を丁重に断ろうとしたが、彼は聞く耳を持たなかった。彼は何が起

こるか決めていたのだ。私たちが道路を走っていると、彼は"ボーイ！"と言った。私は"はい、サー？"と答えた。彼は"俺はジャーヘッドだ！"と言った。私は"はい、サー！"と答えた。彼は言った、"ジャーヘッドとは何か知っているか、少年よ？"私は答えた、"いいえ、サー！"私は「いいえ、サー！」と答えた。彼は言った。私は"はい、閣下！"と答えた。彼は最近、海兵隊ブートキャンプのドリル・インストラクターを引退したのだと言った。(ハイウェイ13番出口のトラックストップに立ち寄り、レストランに入ってメニューを見た。ハンバーガーが安かったので、ウェイトレスにハンバーガーを頼んだ。「ハンバーガー！、ハンバーガー！」と彼は叫んだ。私は心の中で「ああ、神様！頼むから腕立て伏せをさせないでくれ！」。彼は"ウェイトレス！"と言った。彼女は言った。彼は"この子にTボーンステーキを！"と言った。彼女は言った、"ステーキはどのように焼いて欲しいですか、サー？"彼は"ステーキの焼き加減はどうする？"と言った。私は"ミディアム・レアで"と言った。彼は言った。"ミディアム・レアで、ウェイトレス、それから彼にハンバーグを2つとコーヒーを2杯持ってきてくれ"と。そう言うと、彼は立ち上がり、勘定を済ませて出て行った。私は二度と彼を見ることはなかった。

夕食後、パックにハンバーガーを2、3個詰め、さらに深い感謝の気持ちを抱きながら、私は再び車に乗り、州間高速道路29号線をミズーリ州セントジョセフまで走った。夜も更け、交通量も少なかったので、私は陸橋を上り、橋の数メートル下にある小さな平らな場所で夜を明かした。そのとき、私のダウン寝袋が縫い目の長い夏用の袋で、冷気が漏れていることがわかった。冬用のコートを着て寝たし、ズボンの下には防寒用のアンダーウェアを着ていたもので、暖かさには欠けたものの、少しは眠ることができた。

翌朝は早起きした。交通機関はまだなく、霜が降りるほど寒かった。私は身支度を整え、静かな決意を胸に歩き始めた。朝焼けの空に舞う星々を眺めながら、涙が出るほどの感謝の気持ちを抱いた。いい乗り物を捕まえ、午後遅くにはフランク・フルズ・クロウのキャビンに到着した。

フールズ・クロウ酋長が住んでいたのは丸太小屋で、明かりは電気だったが、水は裏庭の手押しポンプで汲み上げ、水と小屋を暖めるために古い薪ストーブを使っていた。

というのも、ガンドパの孫の一人で、シルバースター勲章を持つヴェトナム帰還兵が、ディック・ウィルソンの"グーン・スクウッド"に射殺され、祖父は深い悲しみに包まれていたからだ。悪い時期に到着したにもかかわらず、私は歓迎された。私が到着した夜、吹雪が吹き荒れた。厳しい寒さで、翌日には凍死者が出たという報告もあった。祖父の家に滞在した数週間、私は薪割りをしたり、水を汲んだり運んだり、必要な雑用をこなして自分の役に立とうとした。バケツを外に持ち出して水を汲み上げると、バケツの縁に跳ね上がった水は、汲み終わる頃には固く凍っていた。祖父の健康状態は悪化した。肺炎にかかり、結局、SD州パインリッジの病院に行くことになった。ケイトおばあちゃん一家は、私を歓迎しないと感ずることはなかったが、しばらくして、私は助けになるどころか邪魔者になっていると感じたので、セントルイスに戻ることにした。さようなら、またね、と言ってヒッチハイクでパインリッジに向かい、入院しているおじいちゃんを見舞った。患者のベッドの上には、「フランク・フールズ・クロウ」という患者の名前と、その下に「カトリック」という患者の宗教が書かれた看板があった。(カトリック?!)ローマ法王が病院に入って、その人の宗教が"ヒンズー教"と記載されているのと同じように、私には奇妙に思えた。あとで知ったことだが、おじいちゃん本当にカトリックで、神父や修道女が訪れると、おばあちゃんとおじいちゃんありがたく一緒に祈り、聖体拝領を受けていた。おばあちゃんとおじいちゃんにとって、自我を持たず、神の聖霊と強く結びついて奇跡を起こし、人々を癒すことのできる、まったく謙虚な人であるイエスの物語は、身近なものだった。セントルイスに戻る計画をおじいちゃんに話すと、サンダンス時期にまた来るように言われた。

ファースト・ビジョン・クエスト

私はセントルイスに戻り、春にヴィジョン・クエスト（最大4日間、食べ物も飲み物も口にしない断食期間）に挑戦することにした。フールズ・クロウじいさんが私をヴィジョン・クエストに参加させてくれることを願っていたが、食べ物も水もない4日間に耐えられるかどうか、自分自身を試してみたかったのだ。ラコタ族の儀式であるヴィジョン・クエスト（*Haŋbléčeya*、直訳すると「ヴィジョンを求めて叫ぶ」）では、毛布か水牛のローブ、ショートパンツ（女性はドレス）、そしてセイクリッド・パイプ（*Čhaŋpipe*、直訳すると「聖なるパイプ」）を持って丘に登る。

(*Čhaŋnúŋpa-Wakŋ*) を持って丘に登る。私はセントルイス郊外のロックウッズ保護区という名の野生動物保護区に行き、断崖絶壁に登った。私はポップテントと寝袋を持っていた（だから伝統的なビジョン・クエストではない）が、私は食べ物も水も持たずにその断崖に4昼夜滞在した。日目、私はサンダンス（踊りながら4日間絶食すること）ができるだろうかと思った。立ち上がって踊ってみた。数日間、食べ物も水もない断食は、子猫のように弱々しくなる。疲れ果てて座り込むまで、30秒もできなかつたと思う。、絶食しながら4日間もダンスに耐えるスタミナも意志力も私にはない、だからサンダンスは私には向かない、そう結論づけた。

セロ・ブラッククロウズ・キャンプ・ラコタでのサンダンス（1975年

フールズ・クロウじいさんが住んでいたサウスダコタ州パインリッジ居留地のワンプリーから9マイル東にあるセロ・ブラック・クロウズ・キャンプ・ラコタでのサンダンスのポスターを見つけた。

このポスターにはこう書かれている：

ラコタ・セイクリッド・サンダンス

8月12日、13日、14日、15日

ブラック・クロウズ
キャンプ・ラコタ
ワンプリーから東へ9マイル

パインリッジ・リザベーション

すべての伝統的指導者
すべてのスピリチュアルリーダー歓迎

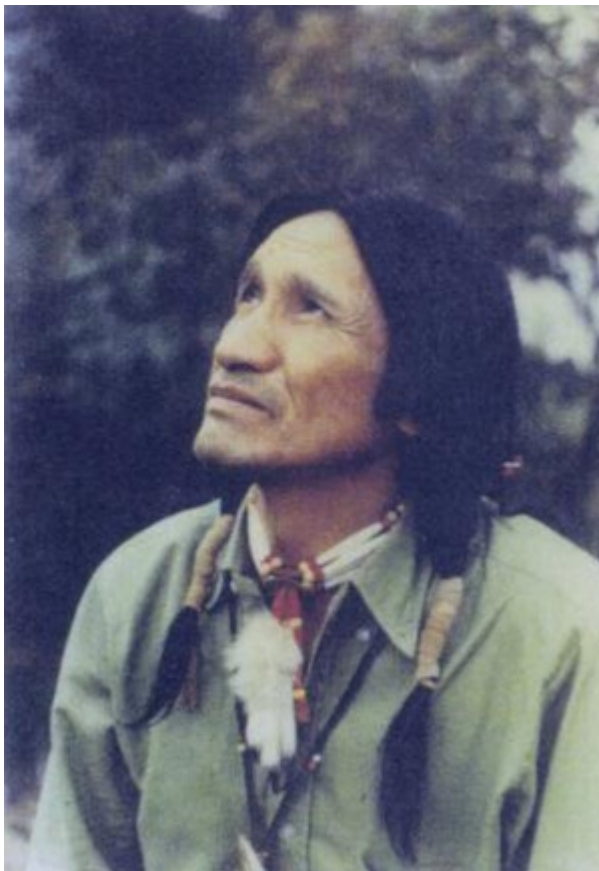
(意訳) 持ってくるな：
ウイスキー、悪い薬（ドラッグ）、銃、カメラ、レコーダー

このポスターと似ているが、このポスターは1976年のサンダンス用のものだ。

1975年の夏、セントルイスからサウスダコタに行くために、私はホンダの100というオートバイに乗った。そのバイクは高速道路での走行が可能で、何の問題もなく旅を終えた。一方、私はこの旅でボロボロになり、非常に痛くて惨めだった。バイクの狭いシートは、街中の小旅行には問題なかったが、数時間もするととても不快になったので、途中で材木店に立ち寄り、12×36インチの木の板を買って座った。サイズに合わせてカットする手段がなかったので、左右に18インチも

はみ出した板の上に座るのはかなりバカみたいだったが、気にしなかった。あの狭いシートに乗るよりはマシだった。

セローズ・キャンプに着くと、私のバイクに乗りたがるラコタの若者が何人かいた。そのうちのひとりが、ディッキー・ムーブ・キャンプという16歳くらいの非常に謙虚な若者だった。彼は若い頃からスピリットとつながりのあるメディスン・マンだとわかった。彼に私のバイクに乗せたのは、精霊たちが彼を導き、殺されるようなことをしないように警告してくれるだろうと考えたからだ。



セロは私に初めてスウェット・ロッジでの浄化の儀式（歌と祈りを伴う特別に熱いサウナのようなもの）を注いでくれた。彼のスウェット・ロッジは再建されたばかりだった。その数週間前、1975年6月26日、ディック・ウィルソンのグリーン部隊が作り出した火種箱のような状況に不慣れな2人のFBI捜査官が、サウスダコタ州オグララ（キャンプ・ラコタから約100マイル）の郊外で不意に逮捕状を送達しようとし、彼らは殺された。当時セロの家には、ラコタの精神修養を学びに来たヨーロッパ人の訪問者が大勢いた。セロは電話を持っておらず（携帯電話もなかった）、

テレビも持っていなかった。彼は自動車にAMラジオを積んでいたが、運転中はカントリー&ウエスタンの曲を聴くだけで、郵便物を受け取るには西へ9マイルも走らなければならなかった。何の前触れもなく、キャンプ・ラコタにチヌーク・ツインローター・ヘリコプターが飛来し、地上数メートルの高さにホバリングして大型機関銃を家屋に向け、M-16で武装した迷彩服を着た連邦保安官がチヌークから飛び降り、腹這いになってセロの家に向かってきた。セロはトレイを用意し、家にいる全員に指輪、時計、財布、貴重品をトレイの上に置く

ように指示した。連邦保安官が近づくと、セロは両手を頭の上に高く上げてドアを開け、トレイを足で前に押し出し、下を指差して叫んだ！"持って帰れ！"と叫んだ。慌てた連邦保安官たちは、"強盗に来たんじゃないんだ！"と言った。(その日、連邦保安官たちはセロのスウェット・ロジ（、柳の苗木を折り曲げて毛布と防水シートで覆ったもの）を掩蔽壕（えんぺいごう）と断定し、取り壊した。

数週間後、私がセロのキャンプに到着すると、ツインローターのチヌーク・ヘリコプターがセロのキャンプをブンブン飛んでいった。ヘリコプターが近づくと、視界に入る前から「トントントントン」という低周波のブレードの音が聞こえてくる。ヘリコプターがセロのキャンプを旋回しているとき、私は「威嚇と解釈されるような急な動きはしないほうがいい」というはっきりとした印象を受けた。その時は着陸しなかった。

第1回ロウアピ薬の儀式)

私はキャンプ・ラコタの長方形の丸太小屋の床で寝た。ある日セロは、その日の夕方過ぎにその丸太小屋でローワピと呼ばれるメディスン・セレモニーが行われることを教えてくれた。

このセレモニーの名前、Lowál_14B↔piは、文字通り「私たちは歌う」という意味である（Lowál_14Bは「歌う」で、「pi」は複数形になる）。この名前は、キリスト教の聖職者たちがメディスン・セレモニーのパフォーマンスを罰していた時代に使われていた合言葉である。ラコタ族は、「私たちは今夜歌うのです」と言いながら、その集まりの本質を見せないことができたのだ。それから数年後、私はフェイガン神父という、とても尊敬するカトリック神父を知っていた。彼は素晴らしくドライで、とても英国的なユーモアのセンスを持っていて、よく自分自身をからかっていた。ある日、フェーガン神父はローヤルピーの儀式を行う家に行った。彼はドアをノックし、開けられると、中に入って人々と一緒に祈ってもいいかと尋ねた。みんな驚いたが、彼は歓迎された。そして、セレモニーが始まる前に参列者にアナウンスをしていいか尋ねた。彼は許可された。彼は、自分がま

だ若い司祭だったころ、居留地に来たばかりのころ、次の日曜日に聖体拝領を拒否するために、この家に来て参列者の車のナンバーを書き留めたものだった、と人々に話した。彼は今、それがどんなにひどい罪であったかを悟り、人々に赦してくれるよう求めたという。多くの涙と抱擁があり、多くの赦しがあった。フェーガン神父はラコタ族の聖なる薬の儀式に残り、祈りを捧げた。

真っ暗闇の中で行われるセロのロウアピの儀式に備え、他の数人の訪問者と私は、薪ストーブを含むすべての家具を小屋から運び出した。私たちは屋根に登り、ストーブのパイプにコーヒー缶をかぶせた。土と水で泥漆喰を作り、丸太と丸太の隙間から光が漏れてきそうなところには漆喰を塗った。すべての窓とドアに敷物と毛布を釘で打ち付け、枕とマットレスを丸めて内壁に当て、人々が座れるようにした。日中、私たちは真っ暗闇の中で虹彩が十分に拡張できるよう、（その小屋には電気がなかった）の懐中電灯をすべて消して中で10分間待機し、光がまったくなくなった時点で、その小屋を式の準備ができたとみなした。日が沈むと、灯油のランタンで照らされた小屋に50人以上の人々が入ってきて、丸めたマットレスと枕の上に座った。メディスン・マンであるロバート・ステッドと彼の助っ人たち、そしてウィラード・パイプ・ボーイ率いる歌手たちが小屋に入ってきて、儀式場の準備を始めた。ロバート・ステッドは控えめでおっとりとした小柄な男だった。もし彼がカリスマ的で、明らかな霊的エネルギーに満ちあふれているように見えたなら、それは疑惑と不信の原因になっていただろう。ロバート・ステッドは祭壇の準備をした。彼はコーヒー缶に灰色のゴファーの丘の土を入れ、その土を床に円錐状に流した。そして、ベニヤ板を押しねじり、ゴファーの丘の土で丸く平らな円を作った。その後、鷲の羽を手に取り、羽の先で土の円にデザインを描いた。助っ人たちは、丸太小屋の真ん中に6フィート×6フィートの祭壇を作り、4方向に3ポンドのコーヒー缶を4つ並べた。この缶の中にウィローの棒を入れ、黒、赤、黄、白の旗を結んだ。これらの色は、人類のさまざまな肌の色も表している。ラコタ族が祈りを捧げるとき、彼らは全人類のためだけでなく、動物、鳥、魚、木々、岩、川、海、そして地球全体のために祈る。彼らの

祈りから取り残されるものは何もない。その後、ヘルパーたちは缶と旗にタバコタイを巻きつける。(タバコタイは、約1.5センチ四方の色布を取り、タバコを一つまみつまんで正方形の真ん中に置き、その正方形を折りたたんで長い紐で結び、結び目(一般的にはクローブヒッチ)の片側にタバコの塊が、もう片側に正方形の残りの部分がくるようにする。紐に結ばれたタバコは、互いに2~3インチほど離れて配置された。典型的な紐には405本のタバコ紐があり、両端には6インチほどの緩い紐がある。6フィート×6フィートの祭壇は、タバコの紐で完全に囲まれてしまう。ヒーリングを求める人の数によって、405本のタバコの紐が祭壇を取り囲むように数セットあることもよくある)。祭壇が設置されると、歌い手たちがパイプを満たす歌を歌い、ロバート・スティードが聖なるパイプ("Čhaṅnúl_14B↔pa")を満たした。

儀式が始まると、ヘルパーたちが灯油ランタンの火を消した。ロバート・スティードは祭壇の中にひとりであった。歌い手たちは精霊を呼び寄せるために神聖な歌を歌い始め、そして彼らはやって来た！私がロバート・スティードについて知っている限りでは、彼の控えめで物静かな性格と絶対的な謙虚さから、彼が強力なメディスン・マン以外の何者でもないと疑う理由はなかった。にもかかわらず、精霊たちがそのセレモニー・ハウスに入ってきて、ガラガラとベルを鳴らし、あちこちに小さな明かりを点滅させたとき、私は疑念を抱かずにはいられなかった。あの男たちはどうやって"トリック"をやっているのだろうか？真っ暗闇の中を歩き回り、壁際に座っている私たちにぶつからないわけがない。私は「男たち」がどうやってこんなことをしているのか、その説明を思いつくのに苦労し続けた。点滅する小さな光は特に不可解で、はっきりと見える真っ白な光の小さな球体のように見えたが、(人間の腕のように)周囲を照らすことはなかった。この小さな光が何十個もあちこちで点滅していたが、明らかなパターンはなく、点滅するときには音も立てず、花火のような匂いもしなかった。私は、自分が体験していることには科学的な説明があるという信念を持ち続けようとしたが、だんだん難しくなってきた。巨大な鳥のような音が聞こえた。驚に違いないと思ったが、翼

を羽ばたかせ、一方の壁から祭壇エリアを縦に横切って飛び、遠くの壁にぶつかり、そして戻ってきた。誰かが走ったにしてはあまりに速かったので、誰かが長い棒に鷲の翼をつけていたのだと思った（誰も長い棒などログハウスに持ち込んでいなかったが）。私が体験していることに対する科学的な説明は、ますますありえず、クレイジーで、ばかばかしくなっていた。

暖かい夏の夜だった。窓はすべて密閉され、50人以上の人々が壁に向かって「頬を寄せ合って」座っていたため、その小さなキャビンはどんどん熱くなっていった。そのとき、氷のように冷たい空気が私を襲った。華氏マイナス20度以下の空気を吸ったときにしか起こらない感覚だ。鼻の穴がシワシワになるのを体験していなければ、おそらく汗をかいてあおられたのだと自分に言い聞かせていただろうが、あの鼻のシワシワは否定できなかった。それをきっかけに、私は自分が体験していることを科学的に理解しようとするのを完全にあきらめ、"私の不信感がいかに完全な愚か者であったかを教えてくださいありがとうございます！！"、"私の愚かさを優しく素晴らしい方法で教えてくださいありがとうございます！！"と静かに祈った。その体験以来、私はスピリチュアルな現象について科学的に納得できる説明を考え出す必要性を感じなくなったが、科学的に不可能だと思うようなことを体験したときには、状況に応じて、黙って、あるいは声に出して、私のような不甲斐ない者と分かち合ってくれた彼らとの体験の賜物、彼らの理解しがたい美しさと遊び心に深い感謝とお礼の祈りを捧げるようになった。

メディスン・セレモニーであれ、スウェット・ロッジであれ、サンダンスであれ、私の通常の現実理解にそぐわないことを経験すると、私はいつも完全に明晰になり、集中し、身体を中心に集中する。それはまるで、私の身体が、何か特別なことが起こっているから、しっかりしなさい、絶対的で厳密な注意を払いなさいと言っているかのようです。私の身体の中で完全に明晰になり、現在に集中し、中心にいるというこの感覚は、格別に爽快だった。

数年後、私はメディスンマンに、スピリット・ヘルパーは以前に来た人々の亡霊なのかと尋ねた。私のヨーロッパの文化では、常に精霊であり、創造主に仕えてきた精霊は天使として知られていたことを思い出しました。

サンダンスの時期が近づくと、ジョン・ファイアというメディスン・マンが、レーム・ディア（「レーム・ディア・シーカー・オブ・ヴィジョン」という本が書かれた人物）としても知られる、4、5人の驚くほど美しい若い女性を連れてやってきた。フルズクロウ爺さんにはケイト婆さんがいて、彼女こそが彼の真実の愛だったからだ。

セロのサンダンスで、私は日陰のアーバーの地面に座っていた。ジョン・ファイアが私に近づき、パイプを差し出し、"吸え!"と言った。私はありがたくパイプを受け取り、1、2秒静かに祈り、2、3口吸って、こう言って彼にパイプを返した、

"Mitákuye oyás'ij" これは "All - My Relations" という意味だ。それが私が初めて聖なるパイプを吸った瞬間だった。

サンダンスの後、私はフルズ・クロウ酋長のキャビンに向かった。彼は他の男たちとサンダンスについて話し合っていたが、私に向かって満面の笑みで言った、

"Tǎkóža (孫よ)、踊らないのか?" と言った。ヴィジョン・クエストをしていたとき、サンダンスを踊ろうと考えたことがあったが、必要なスタミナがないと判断し（本当はとても怠け者で、臆病者なのだ）、挑戦しないことにしていた。でも、ここでガナドパが私に踊るのかどうか尋ねてきた。私は"ノー"とも言いたくなかったし、"イエス"とも言いたくなかった。だから、気のないことを言おうと思って、"ああ、できるよ、おじいちゃん!" と言った。おじいさんは言った。(発音は"ウォッシュティ") "よし!" という意味で、"イエス"のインディアン・サインをした。私は、おじいちゃんが本当に私をサンダンスに行かせたがっていることを悟り、必要な体力がないと感じながらも、あの賢いおじいちゃんを完全に信頼していたので、サンダンスに挑戦することにした。たとえサンダンスへの挑戦

が惨めに失敗したとしても、それは決して大いなる利益のためになると思ったからだ。おそらく私がサンダンスの究極の厳しさに耐えられないことで、（私はサンダンスを完走できなかったネイビーシールズを見たことがある）ラコタの人々に必要な励ましを与えることができるだろう。もちろん、私は自分が何をしているのかわからなかった。何を知るためにどんな質問をすればいいのか、踊る準備のためにどんなものを手に入れればいいのか、それすらわからなかった。（、『The Complete Idiot's Guide to Sundancing』というタイトルの本があったなら、私にはそれを読む資格が十分にあっただろう）。

パイプストーン訪問

セローズでのダンスを終えてリザベーションから戻る途中、ミネソタ州パイプストーンに立ち寄り、パイプストーン国定記念物を訪れた。観光客向けのアクティビティにはあまり興味がなかった。パイプストーンのかげらを手に入れたり掘ったりして、自分用のČhaṅnúl_14B↔paを作って祈ることができるかどうかを知りたかったのだ。その奥にあるガレージ兼メンテナンスエリアで、モニュメントで働いているチャック・ダービーという信じられないほど親切な先住民の男性に出会った。私は彼に、パイプボウルを作るのに十分なだけのパイプストーンを手に入れたいこと、そして作ったパイプで祈りたいことを伝えた。パイプで祈りたいという私の切実な願いを伝えると、ダービー氏はパイプボウルを作るのに十分な大きさのパイプストーンのかげらをととても親切にプレゼントしてくれ、敬虔な気持ちでずっと祈りながらパイプを彫る方法を指導してくれた。私は彼に感謝し、彼の指導と優しさに心から感謝した。その日は記念碑が閉まるまでパイプストーンに滞在し、夕方遅く、日没前、影が長くなってきた頃、私はパイプストーン・クリークまで木立の中の道を歩いて戻った。そこは、私がこれまで見た中で最も美しい場所のひとつだった！あまりの美しさと明らかな神聖さに唖然とした。聖なる場所の深い魔法を目の当たりにし、歓喜の涙を流したことを覚えている。私は、映画『十戒』でモーゼが燃える柴を見て、神が彼にこう命じるシーンを思い出した。私は靴を脱いだかどうか覚えていないが、脱いだかもしれない。

グアテマラ

翌1976年の夏、私はニューヨーク州北部のモホーク・ネイションから「ホワイト・ルーツ・オブ・ピース」と呼ばれるグループを率いるラリホクワッツと一緒に、地震の被災者を支援するためにグアタマラへ行く機会を得た。彼らは建設、医療、農業に詳しい人を求めている。私たちは大型RV車とスクールバスで移動した。私たちのクルーのひとりにメキシコ・インディアンの男性がいて、彼はインディアンの母国語（マヤ語だと思ふ）を話すので通訳をすることになっていた。彼女の家は、パインリッジ居留地の小さな小屋のほとんどよりもはるかに貧しく、彼女の所有物は居留地の最も貧しい一族の所有物よりもはるかに価値がないように見えた。彼女が所有する、価値のない小さな小物はすべて掃除され、磨かれ、完璧なまでに丁寧に棚に陳列されていた。彼女の家の中はとても清潔で整頓されており、私は神社の中に入っているような気がした。彼女は絶対的な威厳をもってすべてを管理していたので、私は非常に裕福で立派な女性の家に入ったような印象を受けた。シンプルだがとてもおいしい食事をごちそうになり、私は感謝の気持ちでいっぱいになった。私とは比べものにならないほど貧しい人たちが、食べ物を用意して私に食べさせてくれるというのは、とても屈辱的なことで、その贈り物を断るのは侮辱にあたる。私にできることは、彼らの贈り物を受け取りながら、深い感謝の念を抱くことだけだ。その日の午後、私は、食べるのに十分で、滞在する場所もあり、医療を受けられる人々の中にいる私の国の貧困は、物質的な豊かさや財産がないことよりも、心の状態に関係しているのだということを理解した。

私たちのグループは、震源地に近いグアテマラの超田舎に向かった。1976年7月4日（独立宣言調印200周年、アメリカでは200周年記念として盛大に祝われた）の夜、私たちはグアテマラの小さな町にいて、打ち上げられる花火を見ていた！しかし、その花火はアメリカ建国200年祭とは何の関係もなかった。このグアテマラの小さな町で上がっていた花火は、翌日に開催される大きなマーケットを祝うた

めのものだったのだ。嬉しい皮肉だった！

ホワイト・ルーツ・オブ・ピースとの時間は、サウスダコタのサンダンスに行く必要があったため、他のクルーより少し早く終わった。私はグアテマラ市までバスで行き、マイアミ行きの飛行機に乗り、それからヒッチハイクでサウスダコタに向かった。

	<p>このポスターにはこう書かれています：</p> <p>サンダンス オグララ・シュー 日舞 7月30日～31日 8月1日～2日 サウスダコタ州ポーキュパイン ナレーター - ノーブル・レッドマン 詳細はこちら200周年記念プログラム ビルジル・キル・ストレート</p>
--	---

1976年、フランク・フルズ・クロウが執り行ったサンダンスはサウスダコタ州ポーキュパインに移った。前年まではパインリッジで開催されていた。私が到着

したのは、ツリーデー（コットンウッドの木を切り倒し、ダンサーたちが担いでサンダンス・アーバーの中央に植える日）の数日前だった。コットンウッドの木から半径40フィートほどの円形のダンスエリアは、東側に開口部がある円形の日陰の東屋に囲まれている（そこからコットンウッドの木がダンサーたちによって東屋に運ばれる）。

ドーソンに馬はいない

ダンスが始まる前、私はドーソン・ハズ・ノー・ホース（Dawson Has No Horse）という非常にフレンドリーで謙虚なラコタ・エписコパスの牧師に会った。、黒いズボンに黒いシャツを着た彼は、明らかに聖職者だった。私は彼がとても好きだった。ドーソンは通常、サンダンスには参加しなかった。彼はセイクリッド・パイプではなくエписコパル教会で祈りを捧げていたが、その年、妻のエミリーに「ラコタの人たちがどのように祈るのか見に行こう」と言い、彼らはサンダンスにやってきたのだった。

私はドーソンに、フルズクロウじいさんへのメッセージを訳してくれないかと頼んだ。私たちはおじいちゃんのテントに行き、ドーソンはラコタ語で、私がおじいちゃんに尋ねなければならない体験の翻訳を頼んだのだと説明した。私はドーソンに私の体験を話した。するとドーソンは、おじいちゃんに何も言わず、おじいちゃんからの返事も聞かずに、「ご飯を食べたら、ご飯の肉を少し取って外に出て、小さな穴を掘って、その穴に肉を入れ、蓋をするんだ。これが地球おばあさんへの供え物になる。私はドーソンにそのアドバイスに感謝し、そうするつもりだと伝えたが（実際そうしている）、私の経験をおじいちゃんに話して、おじいちゃんが何と云うか見てくれないかと頼んだ。ドーソンはラコタ語でおじいちゃんに話しかけ、おじいちゃんもラコタ語でドーソンに返事をした。私はそれを受け入れたが、ドーソンがどうしておじいちゃんの忠告を知っているのか不思議だった。

数日後、サンダンスが開催されている間、ドーソンとエミリーはダンス・サークルを囲む円形の日陰の東屋にいた。ラウンドの合間だったので、ダンサーもヘルパーもみんなダンスエリアから出て日陰で休んでいた。ドーソンはあるビジョンを見て、エミリーをなでた。エミリーは言った。長い間太陽の下にすぎたんじゃない？家に帰りましょう」。ドーソンは言った。行かなくちゃ」。ドーソンが見た男は、古いバッファローハイドのサンダンスカートをはいていた。顔の片側は赤く、もう片側は黒く塗られていた。片方の髪は三つ編みで、もう片方の髪は緩んでいた。彼はドーソンに、ダンス・サークルの真ん中にあるサンダンス・ツリーに来るように言っていた。

シェード・アーバー内のダンス・サークルは非常に神聖な祭壇であり、ダンサーやヘルパーでない者は神聖なダンス・サークルに入ることはできないことになっている。エписコパスの牧師が黒いズボンに黒いシャツ姿で木のそばまで歩いてきたことは、シェード・アーバーにいたラコタの人々にとって衝撃的だった。ドーソンはダンス・サークルの真ん中にある木のそばに立っている男に近づいていた！ドーソンは「なんてことをしてしまったんだ」とショックを受けたが、フールズ・クロウ酋長がダンス・サークルに入ってきて、ドーソンに近づいているのが見えた。フールズ・クロウ酋長は人々にこう告げた。"この男が来年のサンダンスを仕切るんだ"。(もちろん、彼はラコタ語でそう言ったので、何が起きているのかはわからなかった。カトリック教徒であったフールズ・クロウ酋長は、サンダンスやラコタの伝統的な祈り方とは無縁のエписコパスの牧師にサンダンスを譲ったのだ！

サンダンスが終わった後、ドーソンがトラックで運転していると雷が鳴り、雷の中から「ヘイ、ヘイ！」と叫ぶあの男の声が聞こえてきた。そのようなことが続き、ドーソンはますます心配になり、ある日、(ドーソンが建てた)ワクパマニ湖エписコパル教会に入り、祭壇にひざまずいて祈った。祭壇で祈っていると、また雷が鳴り、雷の中で泣いているあの男の声が聞こえた。ついにドーソンは妻のエミリーに、断食と祈りのために家の裏の小高い丘に行くことを告げた。ドー

ソンはエミリーに、どこに行ったかは誰にも言うなと言った。通常、ラコタ族が Hanbléčeya（ヴィジョン・クエスト）に行くときは、事前にスウェット・ロッジに入り、祭壇の場所を示す黒、赤、黄、白の旗をまっすぐなウィロー・ポールに立てる。祭壇の周りには、長い紐につながれた45本のタバコの紐が張られる。ドーソンはそんなものを持っていなかった。ドーソンは丘に登り、ブル・ダラムのタバコ袋を取り出すと、四方に小さなタバコの山を4つ作り、その真ん中に立った。太陽がドーソンを照りつけ、風もない。ドーソンは熱中症で死ぬのではないかと心配した。彼は3日間丘の上にはいたが、3日目の夜になると雷雨がやってきた。ドーソンの目の前に雷が落ち、サンダンス・サークルで見たあの男が雷を駆け下りてドーソンの前に立った。彼は言った。「聖なるショールを手に入れるか、雷を手に入れるか。早く選べ!」。ドーソンは、聖なるショールを選んでユウイピのメディスン・マンになるか（聖なるショールに縛られる）、稲妻を選んで稲妻に打たれて死ぬかという意味だと理解した。ドーソンが「聖なるショールを選ぶ!」と言うと、精霊は「ワシュテ！（いいぞ!）」と言って消えた。（と言って消えた。

翌朝、太陽は昇り、そして沈んだ。そしてまた昇り、また沈んだ。ドーソンは、このダイヤモンドの中にある色鮮やかな十字架のパターンを、ユウイピの祭壇に使うことになっていることを知っていた。

その後、ドーソンはユウイピ・メディスン・セレモニーを開催するようになり、サンダンスが再び訪れる頃には、ドーソンは一人前のユウイピ・メディスン・マンになっていた。ドーソンはエписコパルの牧師であることをやめなかった。彼はワクパマニ湖エписコパル教会の説教壇で聖なるパイプと精霊について語り、ユウイピ祭壇に縛り付けられたままイエスについて語った。ドーソンは「違いはない！私たちは同じ神を崇拝しているのだ!」

ハイホース・ファミリー、サンダンス準備に協力

1976年のポーキュパイン・サンダンスの終わりに、ルーサー・ハイホースという長老が私のところにやってきて、おじいちゃんが私をサンダンスに行かせたがっていることを知っていた。私は「はい」と答えると、彼は一緒に来いと言った。私はおじいちゃんに、ルーサー・ハイホースが私をサンダンスに連れて行ってくれることを告げた。おじいさんは了承してくれた。ルーサーは私をSD州ワンプリーにある彼の家まで送ってくれたが、私はまったく準備ができていなかった。ルーサーと彼の家族は、私にサンダンス・スカートを作ってくれ、メダリオンとイーグルボーン・ホイッスルを手に入れ、セージ・クラウン、リストレット、アンクレットを作ってくれた。旗も作ってくれたし、ツリーに飾るために405本のタバコの紐も結んでくれた。刺すためのロープもくれた。この間抜けなワシチュウを助けてくれたハイホース・ファミリーに、私は今でも深く感謝している！

カラス犬の楽園でのサンダンス

そして1976年8月5日の夕方、ダンス初日の終わりにルーサーが私をCrow Dog's Paradiseまで送ってくれた。その年、クロウ・ドッグズ・パラダイスでのサンダンスのとりなし役は、チーフ・イーグル・フェザーとして知られていたビル・シュワイグマンだった。ルーサーとビル・シュワイグマンは話をしたが、ルーサーがビルに、フールズ・クロウじいさんが私に踊ってほしいと言ったのだろう。ビルはフールズ・クロウ爺さんのことを深く尊敬していたので、寝袋を男たちのティピに置いて、朝になったら踊ろうと言ってくれた。



CROW DOG SUN DANCE

AUGUST 5-8 * 1976

CROW DOG IS IN PENITENTIARY
BUT THE SUN DANCE WILL GO ON.
CROW DOG IS SPEAKING TO HIS NATION.

To all Indian tribes: The Sun Dance has been part of our heritage in the past and must continue to be so in the future. The original Dance occurs when the chokecherries are ripe. The purification day is on August 3rd. The Dance will be held on August 5th, 6th, 7th, and 8th. The Dance will be at Crow Dog's, on the Rosebud Reservation, in South Dakota. All Spiritual Leaders, Chiefs, and traditional people are welcome. Food will be served two times daily. All Sun Dancers who have taken vows must be prepared. Autumn Dawn and Barbara Brave Bird could not be forgotten.



ROSEBUD RESERVATION * SOUTH DAKOTA

このポスターにはこう書かれている：
 カラス犬日舞
 1976年
 カラス犬は刑務所行き
 しかし、日舞は続く。
 カラス犬は国民に語りかけているのだ。
 すべてのインディアン部族へ：サン・チャンスは過去において私たちの遺産の一部であり、今後もそうあり続けなければならない。オリジナルのダンスは、チョーク・チェリーが熟したときに行われる。浄化の日は8月3日。ダンスは8月5日、6日、7日、8日に開催される。
 スピリチュアル・リーダー、チーフ、伝統的な人々なら誰でも歓迎。食事は毎日2回提供されます。
 誓いを立てたすべてのサン・ダンサーは覚悟を決めなければならない。
 オータム・ドーンとバーバラ・ブレイブ・バードも忘れてはならない。
 ローズバッド・リザベーション

毎日、夜明け前の早朝、ビル・シュワイグマンはいつもとは違う方法でダンサーたちを起こした。彼は大声で「GOOD MORNING SUNDANCERS！スピリチュアル・ウェイトレスがベッドに朝食を運んでくる！ベーコン、フライドポテト、ハム、ジュースにコーヒーだ！"断食中のサンダンサーたちは、自分たちに何が足りないかを思い知らされて大声でうめき声をあげたが、それはすべてユーモアのあることで、陽気な雰囲気にも包まれていた。私たちは寝袋を脱いで汗を流し、並んで東屋に入って踊った。この居留地でのサンダンスの驚くべき特徴のひとつは、男女のダンサーが人間の我慢の限界を超えて踊っていたにもかかわらず、男たちは胸や背中 of 皮膚に鉛筆の2番と同じかそれ以上の大きさのチョークチェリーの釘を刺

していたにもかかわらず、ダンサーやヘルパーの精神が特に明るく陽気で、沈鬱さや重苦しさがなかったことだ。

強く踊れたと報告したいところだが、それは正確ではないだろう。私はダンス2日目からダンスを始めていた。一緒に踊った男たちが、私よりもさらに1日分疲れていて喉が渴いていることは知っていたので、私を感じた不満を声に出すよりはまじだと思った。私が完全に馬鹿にされることなくダンスを乗り切ったということで十分だ。ダンスは極限の試練であったが、あのダンスアーチには、50年たった今でも私を痛めつけ、切望させる、手に取るようにわかる、比類なく美しい精神的な存在があった。ダンスの神聖さを圧倒的に感じた記憶が、これを書きながら私の目に涙を浮かべる。ピアスでさえも、何が起きているのか理解していない観察者には、そうは見えないかもしれない。そのような観察者は、ピアッシングをある種のサドマゾ的儀式だと思うかもしれない。そのような観察者は、ピアッシングがある種のサドマゾヒズム的儀式だと思うかもしれない。そのような観察者が知覚せず、感じるができないのは、ピアッシングをしている男は、ピアッシングをしている弟を愛しており、弟に苦痛を与えたくない。この絆には、言葉では十分に表現できない甘さと愛情に満ちた優しさがある。(もちろん、それでも痛いのだが！)。

ドーソンのYuwípiセレモニー

ドーソンがユウィピ・メディスン・マンになったことを知った私は、彼のユウィピの儀式に参加するようになった。ドーソンのユウィピの儀式は、スウェット・ロッジの儀式に先行して行われた。ほとんどのスウェット・ロッジの儀式では、赤みがかったオレンジ色に光る石をロッジの中央にある穴に入れ、扉を閉めると、ドーソンはセージ（よもぎ）を手にとった、セージが石に当たったところに真っ白な火花が散り、たちまち穴の中の石がターコイズブルーのスカイブルーに輝く！穴全体が青く光る石で埋め尽くされるのだ！岩の上にセージの葉が落ちると、赤く光る（だから私は自分の色が正しく見えているのだとわかった）のだが、

岩はその素晴らしい、深く飽和したターコイズ・スカイ・ブルーの色合いだった！今まで見た中で最も美しい色だった！

ドーソンがサンダンス・ツリーのそばと丘の上で見たスピリットは、Čhaṅnúḷpa Gluhámani（パイプを持って歩く者）と名付けられ、サンダンス・スピリットだった。歌い手たちがサンダンス・ソングを歌うと、サンダンス経験者全員が立ち上がって踊り、イーグルボーン・ホイッスルを吹くように促された。あるとき、精霊について尋ねると、いくつかの例外を除いて、彼らは常に精霊であり、常に創造主に仕えてきたと言われた。ユダヤ・キリスト教の伝統では、常に存在し、常に創造主に仕えてきた精霊は天使として知られており、そうである！だから、ラコタ族にとっては、神の現存がサンダンサーとなり、高くそびえ立つ大聖堂を持つヨーロッパ人にとっては、天使は翼を持って現れるかもしれない。それぞれが、私たちに対する神の愛の正真正銘の現れなのだ。

霊の顔に触れる

ドーソンのYuwípiセレモニーでは、私たちが質問したいことがあるとき、真っ暗な中で座っていると、Čhaṅnúḷpa Gluhámaniの手が伸びてきて、私たちの手首を掴み、手と腕を引っ張って彼の頭の側面に触れさせるということが頻繁に起こった。私たちが彼の髪を編んでいる側を触ったか、髪が緩んでいる側を触ったかによって、ドーソンは私たちの質問に対する答えを教えてくれた。真っ暗闇の中で、チャハヌパ・グルハマーニは私たちの腕と手首の**位置を正確に**把握していて、手首を探すために周囲を探し回ることなく、私たちの手首を正確につかむことができたのだ。また、神の聖なる霊のひとりが、私のような不甲斐ない者に神の顔の横を触らせたのだと思うと、そのときのように、考えるたびに身が引き締まる思いがする

バッファローズピリット来訪

あるとき、セレモニーの最中にバッファローの精霊がやってきた。フローリングの床をポンポンと叩く音が聞こえた。私は立ってサンダンスの曲に合わせて踊り

、イーグル・ボーン・ホイッスルを吹いていた。その温かな鼻の穴から、熱く湿った息が私の腹に吹きかかるのが聞こえ、感じられた。そのときまでに、私は科学の常識を覆すような多くのことを目の当たりにしてきたので、自分が体験していることを「科学的」に理解しようとは思わなくなっていた。怖くもなかった。儀式に登場する精霊たちは創造主のしもべであり、私たちを愛していること、そして体験することが祝福であることを、私は疑いなく知っていた。

しばらくして、私はユージン・イエロー・ボーイとともにドーソンの歌手のひとりになった。時々、ジョン・アラウンド・ヒムが来て歌うこともあったが、その場合はユージンと私が彼に譲った。ジョンは明るく澄んだ声の素晴らしいシンガーだった。やがて私は、ユージン・イエロー・ボーイと一緒に、ドーソンのユウイピ祭壇の手伝いをするようになった。ユージンと私は、旗を立て、祭壇の周りにタバコの紐を巻き、祝福のためにパイプを祭壇に渡すのを手伝い、ドーソンをホーリーショール（毛布）で縛り、そっと寝かせ、祭壇を閉めて、明かりを消した。Opál_1E7←i（パイプを満たす／捧げる）の歌が歌われると、ドーソンは人々にパイプを持って来るように呼びかけ、パイプを満たす。これらの満たされたパイプは祭壇の内側に渡され、セレモニーの間、精霊に祝福されるためにパイプラックに置かれる。儀式が終わると、パイプは持ち主に配られ、持ち主は火をつけてパイプを回し、全員で吸う。すべてのパイプが吸い終わると、宴会が始まる。儀式を執り行う人は、癒しを祈りに来た人々に食べさせるために食べ物を持参する。これらの儀式での食事は特に美味しく、豊富だった。食べ残しを家に持ち帰ることもできるほどだった。

ユウイピが始まる前に、ドーソンは病人の治癒のための祈りの供え物として肉片を捧げたい人から肉の供え物を受け取る。肉を捧げる人はパイプを持って祈り、肉を受け取る人は上腕の皮膚の下に鋭利なピンを刺して皮膚を引き上げ、剃刀で切り落とす。その小さな皮膚片（直径1ミリほど）は四角い赤い布に入れられ、タバコタイのような紐で結ばれて祭壇に置かれる。

私はほとんどいつも、癒しを必要としている人のために肉の供え物を捧げていた。やがてドーソンは、肉を捧げる人々から肉の供え物を受け取ろうとした。そのとき、私はそのコツをつかめず、肉を捧げる人たちに過度の苦痛を与えてしまったのではないかと心配した（そのことについては、今でも本当に申し訳なく思っている！）。数年後、私はサンダンスでヘルパーとして肉を捧げる仕事を任され、そのコツをつかんだ。私はいつも、少しでも肉を捧げたいという彼らの願望を満たすのに十分で、かつ最小限の痛みで、できる限り小さな肉を取ろうとした。ピンを刺して小さな肉片を引き上げ、カミソリの刃の位置を慎重に決め、10分の1秒か20分の1秒もかからない素早い動きで小さな肉片を切り落とした。私は、肉片をもらったあと、ピンと剃刀を赤い刃物入れに入れ、次の人のために新しいものを用意した。肉を取るとき、私は創造主に捧げられた贈り物に感謝の祈りを捧げ、肉を捧げた人の健康と幸福、そして善意を祈った。

最も記憶に残る肉の捧げもの

私が一番好きで、一番印象に残っている献肉を覚えている。とても小さな女の子が、恐怖に震えながら祭壇の前に現れた。彼女は恐怖のあまり、ほとんど話すことができなかった。彼女の口は乾き、声は震えていたが、祖母の健康のために肉を捧げたいと言った。肉体を捧げることを恐れたのは、その痛みが恐ろしいと思ったからだ。祖母のためにその犠牲を払う覚悟はできていた。私は涙をこらえながら、彼女を座らせた。（）私は彼女にパイプを渡して持たせ、イーグルの羽の扇子で彼女をブラッシングして祝福し、祖母の健康と幸せ、そして長寿を大声で祈った。私はできる限り小さな肉片の下にピンを刺して引き上げ、素早く切り落とした。少女は驚いて辺りを見回し、「これで終わり？」と言った。私は「はい」と答えた。そしてショックと大喜びの様子で、「感じなかったの！」と言った。私は感謝の涙を流しながら、彼女に「よかった。私は彼女に、ピンの先についた小さな肉片を見せた。肉片を取ったところには、ほんの一滴の血が流れていた。私はその肉片を四角い赤い布で包み、他の肉片の供え物と一緒に紐で結ぶのを彼女に見せ、その日の終わりに取り出してサンダンスの木に飾るのだと説明した。私は

彼女に、彼女の祈りがいかに純粋なものであったかゆえに、それを感じなかったのだと言った。

1977年のポーキュパイン・サンダンス

1977年にサンダンスがポーキュパインで開催されたとき、ドーソンはフルズ・クロウじいさんのアドバイスのもとでダンスを運営し、ドーソンもじいさんもティピの中で開かれたミーティングで「私が踊ることを許可すべきだ」と話したが、ミーティングに参加したさまざまな庄屋たちが「白人が踊ることを許可すべきではない」と主張したため、答えはノーだった。それが決まったとき、私はティピの外にいた。サンダンス・ツリーの上の枝から白い旗が落ちるのが見えた。ドーソンはそれを見て、東屋に入り、拾い上げてたたみ、祭壇に置いた。白人がサンダンスに拒絶されたことを意味するのかと思い、ドーソンにその意味を尋ねると、ドーソンは「白は純潔の色で、あのティピで起きたことは純潔ではなかった」と言った。

当時、サンダンス終了後の4日間、サンダンス・アーバーでパウワウが開催された。そのパウワウの最中に、伝統舞踊を踊る男性の一人が心臓発作を起こして倒れた。パウワウには医師や医療関係者も参加していたので、彼らは彼に心肺蘇生法を施し始めた。インディアンの人たちはみんなピックアップトラックに乗っていて、バンを持っていたのは私だけでした。私はフォルクスワーゲンのバンの後ろにベッドを置いて、そこで寝ていました。携帯電話もなく、救急車を呼べる警察もいなかった所以、私はバンに乗り込み、医師たちが倒れた男を私のバンの荷台に乗せ、医師たちが男の心肺蘇生を続けている間、私はパインリッジの病院まで全速力で走った。病院に着くと、医師たちは除細動器を使おうとしたが、彼を蘇生させることはできず、そのまま息を引き取った。

ロバート・ステッドの『Lowál_14B↔pi』におけるゴースト・ダンス

セロ・ブラッククロウズ・キャンプで、ロバート・ステッドが執り成しをする別のローアピが行われることを知ったので、私はセロのところへ行った。今回、ランタンが吹き消され、呼びかけの歌が歌われ、精霊たちが入ってきて動き回り始めたとき、私はすでに、科学的根拠に基づく現実の性質として理解していたものを破るような多くのことを目撃していたので、その部屋にいた存在が聖なる精霊の現れであることに何の疑いも持たなかった。

何が起きているのかという疑念がなくなったので、私は病人が必要な助けと癒しを得られるように祈ることに注意を向けることができた。ロバート・ステッドは私たち全員に（英語で）立ち上がって踊るように、そして私たちはゴースト・ダンスをしているのだと言った。私の隣に座っていたラコタ族の一人が、チーフ・レイン・イン・ザ・フェイスのスピリットが私たちと一緒に部屋にいて、私たちと一緒にゴーストダンスを踊りたがっていると教えてくれた！私はとても嬉しく、ありがたく立ち上がり、レイン・イン・ザ・フェイス酋長と一緒にゴースト・ダンスを踊った！

セレモニーと祝宴が終わり、私が帰ろうとしたとき、ロバート・ステッドに礼を言うと、彼はこう言った！彼らは君と一緒にサンダンスを踊ることを望んでいないけど、チーフ・レイン・イン・ザ・フェイスは君と一緒にゴーストダンスを踊れることを喜んでいたよ。私はちょっと胸が詰まって、そう言ってくれた彼にお礼を言った。

黄色いパネルバン

私は古い中古の黄色いパネルバンを買うことができた。私は2インチの角材をバンの床にテープで貼り付け、約12インチ間隔で格子状に並べた。床、壁、天井、後部ドアに発泡断熱材を吹き付ける業者に頼んだ。床のブロックの上から発泡スチ

ロールを切り落とし、そのブロックの上に合板の床を敷いた。後部ドアには窓が2つあったが、発泡スチロールがかからないようにテープで止めた。駐車するときは、この板を上には振り上げると、発泡スチロールが窓に押し付けられ、アイとフックで固定される。大きな毛布とプリントの壁掛けを縫い合わせ、その間に6ミリのプラスチックを挟み、端に沿ってマジックテープを付けた。運転席と助手席の間と、断熱材の入ったバンの後部座席に、マジックテープで毛布とビニールを吊るした。ベッドには、牛乳箱の上にクイーンサイズのベニヤ板を後部ドアに立てかけ、その前に運転席の後ろに座り心地のいいふかふかの椅子を置き、読書灯とスペースヒーターを置いた。

フルズ・クロウのおじいちゃんとおばあちゃんと暮らしていた頃、私は地元の電気会社にお金を払って、おじいちゃんの家隣の電柱にメーターとコンセントを設置してもらった。私は冬の間ずっとそのバンで暮らし、毎月の電気代は10ドルか12ドルを超えることはなかった。おじいちゃんとおばあちゃんを違う場所に車で連れて行くとき、私は毛布／ビニール／壁掛けを下ろし、おばあちゃんはふかふかの椅子にゆったりと座り、おじいちゃんは助手席に乗った。

ラピッドシティでのパウワウ。

あるとき、私はラピッド・シティで開催されたパウワウに、フルズ・クロウのおじいさんとおばあさんを私の黄色いバンで連れて行った。私たちはアリーナの入り口から中距離にある駐車場に車を止め、アリーナの入り口まで歩いた。

おばあちゃんは、エルクの歯で飾られた美しいビーズの雪のような白いバックスキンの女性用民族衣装を着ていた。おじいちゃんは酋長の正装だった。イーグルの羽が二列に並んでいて、地面まで届きそうなほどだった。それぞれのイーグルの羽にはビーズの軸があり、羽の先端からは馬の毛が伸びていた。おじいちゃんは長い黒髪のカツラを2本の長い三つ編みに結び、それぞれの三つ編みを前足と頭がついたままの白い動物の皮（たぶんアーミンかイタチ。一見すると不釣り合いだが、本当に驚いたのは、広い駐車場を横切るとき、おじいちゃんがおばあちゃ

んのフリフリの財布を持っていたことだ。これこそ真の酋長であり戦士のすることで、重い財布を持つことで女性を助けるのだと気づくまでは、不自然に思えた。見かけによらない！私は本当にカメラを持っていて写真を撮りたかった。タフな若い戦士たちにとって、素晴らしい教訓になっただろう。

おじいちゃん、条約会議に行く

ラピッド・シティまで行くこともあれば、デンバーまで行くこともあった。条約評議会は正午に始まる予定で、人々は12:45頃に現れ始め、訪問したりコーヒーを飲んだりした後、1:30から2:00頃にミーティングが始まる。会議はいつも祈りで始まり、祈りで終わる。(条約会議もそうだったが、ゴミ収集について話し合う部族評議会のような平凡な会議でも、やはり祈りで始まり、祈りで終わる)話し合いは常にラコタ語で行われたので、何が話されているのかはわからなかったが、会議の感情的なトーンは理解できたし、それらは繰り返し一定のパターンに従っているように思えた。私の観察結果や、私が考えていることが少しでも正確かどうかはわからないし、私はおじいちゃんをととても愛していたので、公平な観察者ではないが、私が観察したことは以下の通りだ：まず、開会の祈りの後、主催者が問題点を説明する情報段階があったようだ。質疑応答があり、その後、さまざまな責任者が立ち上がり、自分たちの意見や見解を述べた。ほとんどの場合、それらは合理的でよく考えられたものだった。、少し熱く、情熱的な意見もあった。爺さんは静かに座って観察していた。彼らは皆、頭を下げて自分の膝を覗き込み、諭されているような顔をしていた。しかし、確かにそれはおじいちゃんの口調ではなかった。おじいちゃんが話し終わると、問題は解決したかのように感じた。誰かが短い閉会の祈りを捧げ、ミーティングは終わった。おじいさんはしばらく残って出席者の何人かと陽気に話し、私はおじいさんを家まで送った。家に着くと、おじいちゃんはおばあちゃんと一緒にソファに座り、おばあちゃんの方を向いて会議で何があったかを熱心に話した。それからおばあちゃんが意見を述べ、おじいちゃんが下を向いている間、おばあちゃんは自分の考えを長々と話した。

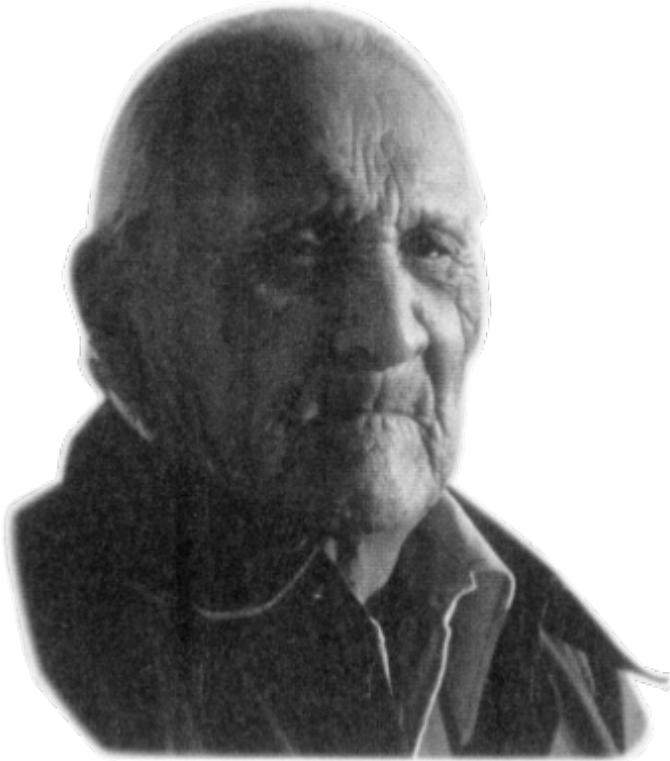
おじいちゃん和ダライ・ラマに会う

ある時、おじいちゃん和私が会議でデンバーに行ったとき（おそらくエベレット・ロネヒルも一緒だったのだろう）、ダライ・ラマに会うためにホテルに案内され、エレベーターを上げてスイートルームの前の広い場所に行った。当時、私はダライ・ラマが誰なのかよく知らなかった。名前は聞いたことがあったし、重要な仏教指導者であることも知っていたと思うが、それよりもフールス・クロウじいさんの方が印象に残っていた。祖父が握手した後、私は丁寧にダライ・ラマと握手をした。ラコタ族のマナーに従い、握手の際にダライ・ラマの目を見ようとはしなかった。（ラコタの伝統では、敬意を示すとき、年長者の目を見ず、頭を下げる）。

祖父は私を見つめ、私を通して見る

おじいちゃんと暮らしていたとき、私が部屋に入ると、おじいちゃんが私をじっと見つめることが何度かあった。怒っているようにも、不機嫌そうにも見えなかった、でも、その瞬間、おじいちゃんは私の心をまるで開かれた本のように読むことができ、もし私が何か秘密を抱えていたとしても、絶対におじいちゃんはそれを知っているだろうと、私は疑いなく思った。十分に祈っているだろうか、おじいさんは私の中に何を見ているのだろうか、私は我に返った。そしておじいちゃんが目をそらすと、私はリラックスした。自分の内面を見透かされている

ような視線を向けられるのは、不安の極みだった。



Dawson Names Me Pǎ

ラコタ語には "r" の音がないので、ラコタ族は私の名前 "プレストン" を発音しにくいと感じていた。ある日、ドーソンが言った。「君の名前の "Pweston" は言いにくいから、Pǎと呼ぶよ！君の名前はŠúnka Pǎéstoで、グレイハウンドやハウンドドッグのような鋭い鼻を持つ犬だ！"この名前はすぐに浸透し、ラコタ族は私のことを「Pǎ Fésto」と呼ぶようになった。おそらく、私はその名前にふさわしい人間なのだろう。私はかなり欠点のある人間で、常に成功するわけではないが、より良いことをしようとしている。

祖父は私をナウ・ウィジピと名付ける

ドーソンが私にP'héstoと名付け、その名前が定着して間もなく、フルズ・クロウじいさんは私にNaúŋwizipiという名前をつけた。祖父は私を呼ぶと、"Jealous, hiyúwo!"と叫んだ。(私を妬んでいた人たちがいたのだろうが、その理由がどうしても想像できない。非自発的な独身生活を送る私の哀れな存在は、かなり孤独で、私が望み、切望していたものではなかったことは確かだ。

おじいちゃん、脳卒中のドーソンを癒す

私は参加しなかったが、パウワウ（社交ダンス）に参加し、その様子を目撃した何人かの人たちからこんな話を聞いた。ドーソンはトラディショナル・ダンス（バSSLルー本）を踊っていて、脳卒中で倒れてしまった。その場にいた人たちによると、かつらをかぶった酋長姿のフルズ・クロウじいさんがドーソンに近づき、かつらの三つ編みから頭と前足がついたままの小さな動物の皮をほどいて、その動物の皮をドーソンの背中に乗せて祈ったという。何人かの人によると、その毛皮は動き出し、ドーソンの体を這い回り、頭まで行ってしゃぶり始め、ぐったりしてしまったという。ドーソンは立ち上がり、完治した。インディアンでない人たちがこの話を信じるとは思わないが、私は私の科学的理解に反する奇跡をたくさん目撃してきたので、絶対に信じている。

ピート・スウィフト・バード

霊がドーソンのところにやってきて、誰かがドーソンをハブレチェヤのために丘にさせるためにやってくるが、ドーソンは霊が言ったことを誰にも言ってはいけない。数ヵ月後、雪道を車で走っていると、ドーソンの後ろにピックアップトラックが停まり、ライトを点滅させ始めた。ドーソンはピックアップトラックを追い越そうと道路脇に寄ったが、トラックはドーソンの後ろに割り込んで停車した。運転手が降りてドーソンに近づいてきたので、ドーソンは少し心配になった。ドーソンは窓を開け、それがピート・スウィフト・バードであることを知った。彼はドーソンの式典や教会の礼拝に出席するような人物ではなかった。ピートは

言った。「この春、君をハブレチェヤのために丘に立たせるために、弟のジョーと僕は毎週スウェット・ロッジをしているんだ」。ドーソンは驚いたが、スピリットが彼のもとにやってきて、ピート・スウィフト・バードが彼らが話していた人物であることを告げた。丘に行く準備をするために、ドーソンと私はピート・スウィフト・バードの家に行き、スウェット・ロッジの儀式を受けた。ピートが住んでいたのは、ピートの敷地を通り過ぎたところにある小川につながる砂利道で、小川の向こう側には高い断崖があった。ドーソンはその断崖絶壁を指差して、小川を隔てたその高い断崖絶壁では決してハブレチェヤをしないようにと私に警告した。私はドーソンに、あの断崖絶壁でビジョン・クエストをしようとは思わないと断言した。ドーソンはまた、ピートとジョーはheyókǎh（聖なる道化師）であり、しばしば後ろ向きに物事を行うが、heyókǎhの話題はデリケートな話題であるため、彼らには触れないようにと言った。ずっと後になって、ピートの家に汗を流しに行ったとき、彼は私に「まず西に祈り、次に南に祈り、次に東に祈り、次に北に祈れ」と指示した（これは反時計回りだ。ラコタ族は通常、北半球の太陽の動きと同じように、時計回りに西、北、東、そして南に祈るのだ）。私はピートの指導をありがたく敬意をもって受け入れたが、彼が私に逆向きに祈れと言っているようには見えなかった。heyól_21fasが物事を逆に行うとき、それは冗談でもなければ、人が馬鹿にすべきことでもない。

ドイツの医学者

あるサンダンスで、ドイツ人の医師に会った。彼はなまりのある英語を話し、私は彼をととても気に入った。私は彼をドーソン・ノー・ホースのユウィピ・セレモニーに招待した。セレモニーが始まる前、彼はとても謙虚にドーソンに、自分の首から下げているかばんの中に、医療行為の一環として話しかけたり、指導を受けたりする小さな石がいくつか入っていることを告げた。ドーソンは、「はい、もちろんです！」と答え、その石の入った袋を持って、祭壇の西の旗にかけ、精霊たちが入ってきたときに祝福を受けるように勧めた。そして儀式が終わると、ドーソンは皆に、精霊たちは袋の中の石が「イヤシチャ」（ラコタ語でドイツ語

を意味する「イー-ヤー-シェ-チャ」と発音する)を話していると報告し、私たちのドイツ人医師の友人は、その石に創造主の聖なる精霊からの導きを受けている一人前のメディスンマンであることを告げた。ラコタ族のドイツ語という言葉は、おそらく多くのラコタ族が戦った第一次世界大戦の時代にまでさかのぼるもので、文字通り「響きの悪い言葉」を意味する。私はまた、創造主の聖なる霊が謙虚なドイツ人医師に祝福と導きを与えていたことを知り、とても嬉しい驚きを感じた。

アイ・ダンス・イン・1978

私が病院まで送った男は、私が踊ることに反対した庄屋の一人だった。病院まで送った時点では、彼が私に反対したとは知らなかった。もちろん、知っていたとしても問題はなかった。ある男が助けを必要としていたので、私は彼を助けようと最善を尽くした。1978年にサンダンスが始まろうとしていたとき、人々はこう言っていた。"彼はワシチュ（白人）が踊っていることに反対を唱えたが、彼が倒れたとき、ワシチュは彼の命を救おうとした"と。それで、私がサンダンスに参加することが決まったのです。

私はサンダンスに参加させてもらえることになり、とても嬉しかったが、ラコタ族がサンダンスを、踊りたいという白人（またはインディアンでない人）に簡単に開放しないことを願った。私のアドバイスとしては、"No"とは言わず、"Not yet"と言うべきだった。ラコタと共に政府やラコタの土地を盗もうとする者たちに立ち向かい、ラコタ流のやり方で創造主を崇拝することに召されていると感じる非インディアンたちは、ラコタが彼らの心を深く知り、彼らや彼らの聖なる道への献身を信頼するまで、ラコタと共に踊りや儀式を守り、奉仕するようにしましょう。それは、私がそうであったように、何年もかかるかもしれない（そしておそらくそうすべきなのだろう）。

When Jesus Comes Back

ある時、ピート・スウィフト・バードのキャンプで、スウェット・ロッジの石が焚き火で温まるのを待っているとき、ピートが言ったんだ。"イエスが戻って来られるとき、**そして戻って来られる**とき、教会にいる人たちはみんな知らないだろうけど、路地の酔っ払いやホームレスの家族は、イエスに会えるんだ"（ピートは本当に"戻って来られる"と強調した）。(ピートは本当に"AND HE IS COMING BACK"を強調した) 彼がこう言ったとき、私はイエスが社会から拒絶された人たち、盗人、売春婦、徴税人たちと一緒に時間を過ごしたことを思い出した。今日、イエスは貧しい人たち、抑圧から逃れてきた移住者たち、そして社会が拒絶しているトランスジェンダーたちとともに時間を過ごすだろう。彼らに慰めと安らぎを与え、彼らとともに立ち、彼らを拒絶し抑圧する者たちを糾弾されることだろう。教会については、飢えた人々に食事を提供するための炊き出しのスポンサーになっているだろうか？困っている人々に奉仕するアウトリーチプログラムはあるのだろうか？貧しい移民や同性愛者、トランスジェンダーを公然と歓迎しているだろうか？マタイによる福音書25章で、イエスは言われた。"これらの最も小さい者のひとりにしなかったように、わたしにしなかったのである"。もし私たちがある人々を"他者"として扱い、私たちが関心を寄せる人々のグループに属さないのであれば、明らかに私たちはイエスも"他者"であるとみなし、ひいては神の王国を拒絶することになる。しかし、そのような罪を率直に悔い改め、償い、以前拒絶した人々を受け入れ、神の赦しと許しに心を開くのに、遅すぎるといえることはない。"他者"は存在しない。

たった5人のYuwípi

ドーソン・ノー・ホース・ユウィピのセレモニーには、たいてい25人から40人以上が参加した。一度だけ、緊急のヒーリングが必要な人が現れたときがあった。その夜、セレモニーハウスにいたのは、ドーソンと病気の女性、ドーソンの妻エミリー、ユージン・イエロー・ボーイ、そして私だけだった。ユージンと私はそれぞれドラムを持ち、並んで座ってコーリング・ソングを歌っていた。セレモ

ニーハウスで私たちの向かいに座っていたエミリーの澄んだ歌声が聞こえてきた。ユージーンと私から少し離れた毛布や聖なるショールの中から、病気の女性が祈り、ドーソンが「ヘイヘイ！」と泣いているのが聞こえた。それでもなお、精霊たちはセレモニーハウスのあちらこちらでガラガラを打ち鳴らし、小さな閃光を起こしていた。もし私が以前から精霊の存在を信じ、その実態を知らなかったとしたら、これは私の理解と現実把握に挑戦するものだっただろう。しかし、私はまったく驚かなかった。私はすでに多くの現実を曲げる現象を経験していたので、これは普通のことだに思えたのだ。

特別に長い名前のスピリット

私がいくつかの情報源から聞いた話のひとつに、死にそうな病気にかかった小さな男の子の話がある。儀式の中で、メディスンマンは少年に、スピリットが彼を癒すつもりだが、スピリットが少年に頼みたいことがあると告げた。その精霊の名前は非常に長く、発音が非常に難しく、覚えるのも難しいものだった。薬師は少年に、精霊は少年の名前をととても気に入っていて、もし少年が許可するなら、精霊は少年の名前を少年に教えたいと言った。少年は許可を与え、そのスピリットは今"スコッティ"という名前を通っている。スコッティという名前のスピリットと仕事をしたことがあるメディスン・ピープルは何人もいると聞いています。創造主の聖なるスピリットは、その驚くべき優しさと甘美さで私を驚かせてやみません。

ピート・スウィフト・バードがスティーブ・ローレンスを知っているか尋ねる

ピート・スウィフト・バードを訪ねたとき、彼は私にスティーブ・ローレンスという金髪で十字架の目をした白人を知っているかと尋ねた。私はピートに、スティーブ・ローレンスという名前のそのような人物には会ったことがないと言った。ピートは、スティーブ・ローレンスを自分の家から小川を隔てた断崖絶壁にあるハブレチェヤ（ビジョン・クエスト）に連れて行ったと言った。この断崖絶壁

は、ドーソンが「断崖絶壁で断食して死んだ人がいるから避ける」と警告していた場所だ。ピートは、スティーブ・ローレンスをその断崖の上でハブレチャに参加させた経験について話してくれた

インファマス・ブラフのスティーブズ・ハブレチャーヤ

それから何年も経って、私はスティーブ・ローレンスに会った。彼は、ピート・スウィフト・バードが説明した通りの人物だった。彼は金髪で、極端に横目だった。彼はまた、ピート・スウィフト・バード以上に "heyókħa" でもあった。彼にとってヘイコク21ファであることは演技ではなく、彼の一部であり、常に物事を後ろ向きに考えていた。私は彼をととても気に入り、非常に親しい友人になった。彼は、ピート・スウィフト・バードに悪名高い断崖絶壁でハブレチャをさせられた経験を話してくれたが、それはピートから聞いた話と一致していた。スティーブは、ホーチョカ（祭壇）にいて、人々が彼にちょっかいを出しに来るかもしれない、あるいはそのように祈ることで彼につらい思いをさせるかもしれない、と恐れていたと言った。雷雨が吹き荒れ、雨が降り始める前に雷があたり一面に落ちた。彼は立ったままパイプを掲げて祈っていたが、静電気の放電がシューシューと音を立て、斜めにしていたパイプの莖を伝って頭上の空に消えていった。彼は心の中でこう思った。"このWakil_14Bη（稲妻や雷のような存在）がここにいるのはいいことだ。"なぜなら、今さら私にちょっかいを出しに来るバカはいないからだ。そのとき雨が降り始め、長く激しく降り続いた。彼の毛布はすっかり濡れてしまった。やがて雨は小降りになり、やがて止んで、嵐の雲は完全に吹き払い、スティーブは雲ひとつない明るい星空の下に取り残された。スティーブは祈り続けたが、やがて明かりが近づいてくるのが見えた。するとピックアップ・トラックが彼のホーチカのすぐそばまで来て、エンジンを切った。スティーブが立ち上がると、ピート・スウィフト・バードがとても驚いた様子で、"OH！生きてたんだ！"と言うのが聞こえた。ピートはピックアップ・トラックから降りて荷台に行き、大きなビニールシートを取り出してスティーブのホーチカに投げ入れた

！濡れるかもしれないぞ！」。スティーブは「ああ、ありがとう、ピート！」とできるだけ皮肉っぽく言って、ピートは車を走らせた。

サンダンス・ヘルパーのゲータレード

数年後、私がスティーブ・ローレンスに会ったとき、彼はサンダンスをしていて、ラウンドの間にヘルパーのティピの後ろにヘルパーが休憩できるエリアがあり、ヘルパーは断食をしていなかったため、このエリアにゲータレードのボトルが置いてあった。スティーブがふらふらとこの制限されたヘルパーのエリアに戻ると、彼に気づいたヘルパーの一人が「おい、ここに戻ってはいけないぞ！」と言ったので、スティーブは腰を下ろした。彼は手の届くところにあるゲータレードのボトルに目をやり始め、別のヘルパーが「おまえは何も飲んじゃだめだ！」と言ったので、スティーブはゲータレードのボトルを1本手に取り、キャップを外して飲み始めようとした！座ってゲータレードを飲め！」。スティーブは平手打ちを食らったような顔をした。スティーブは平手打ちを食らったような顔をして、ゲータレードを飲み干し、それを置いて立ち上がり、立ち入り禁止区域を出た。ライナスは、スティーブに「座ってゲータレードを飲め」と言うのはルール違反だから、言うべきじゃなかったと言った。

スティーブは霊と交信している

スティーブと過ごす時間が長くなるにつれ、私は彼が精霊と交信しているのを観察し始めた。私にはそのような霊的な能力はないので、これは私の靈感によるものではなかったが、フランク・フルズ・クロウやドーソン・ノー・ホースと暮らしたことがあるので、彼らが霊と交信するときのどのように見えるかは知っていたし、スティーブが同じことをしているのを見た。

1982年、私は保留地でヒンデイという私よりはるかに頭のいい美しい英語教師と出会い、理解しがたい理由で彼女も私を気に入り、1983年に結婚した。それから約9年後、ヒンデイはホジキンリンパ腫と診断された。彼女の腫瘍医は、胸にネルフ・フットボールほどの大きさの腫瘍があり、上大静脈が潰れる恐れがある

と説明した。木曜日にCATスキャンをしたところ、肝臓に腫瘍があることがわかった。その腫瘍がホジキンス細胞なのか、それとも違う種類の腫瘍なのかを調べる必要があると言われた。CATスキャンによる針生検を翌週の火曜日に予定して、肝臓にできた癌の種類を調べることになった。(その金曜日、私はスティーブ・ローレンスの家に車を走らせた。私はパイプに水を入れて彼に差し出し、ヒンデイのためにメディスン・セレモニーをしてくれるよう頼んだ。スティーブは、自分はメディスン・マンではないし、メディスン・セレモニーなどやったこともないし、パイプを捧げる相手を間違えていると抗議した。私は目に涙を浮かべながら、彼が精霊とのつながりを作っているのを見たことがあるのだと説明した。私はただ、彼に祈り、努力することを求めただけなのだ。祈っても何も起こらなかったら、それはそれで受け入れると言った。私の目に涙が浮かんでいるのを見て、彼は私の頼みを断ることができず、ヒンデイと私のアパートにセレモニールームを設け、窓にアルミホイルを電気テープで貼り、金属が光らないようにホイルの窓の前にカーテンを閉めた。



私たちはゲイリー・ホワイトレッグスというシンガーに歌に来てもらい、スティーブはゲイリーに儀式用に作っていたドラム（写真）をプレゼントした。スティーブは祈りながらパイプを満タンにし、妻のディーナに手渡した。私たちは明かりを消し、ゲイリーはコーリング・ソングを歌い始めた。ディーナは何も信じな

かったが、彼女とヒンディーは友人であり、友人のために祈ることができて嬉し

かった。真っ暗な中、ディーナは動く青い光が見え始め、「これは私の目がいたずらをしているんだ」と思った！これは本物だ！"と。セレモニーの最後にスティーブは、ヒンデイの主治医は以前はジーザスを信じていたが、今は信仰を失い、科学だけを信じている。精霊たちは、主治医にはまだやるべきことがある、すべてを治すつもりはない、と言ったが、主治医は驚きを隠せなかった。火曜日にCATスキャンによる針生検を行ったが、腫瘍は見つからなかった。見つかったのはヒンデイの肝臓にある脂肪だけだった。腫瘍はなかった！ヒンデイはガン治療を終え、20年以上ガンと無縁だった。

スティーブがメディスン・セレモニーを行えるという噂は広まり、人々はパイプを手にスティーブのもとを訪れ、メディスン・セレモニーを行うよう依頼するようになった。スティーブは、創造主の癒しの精霊たちとのつながりを広めようとはしなかった。それはすべて、実際に助けや治療を受けた人たちによるものだった。スティーブは、私がフルス・クロウじいさん、ドーソン・ノー・ホース、ロバート・ステッドと過ごしてメディスン・ピープルに期待するようになった謙虚さとエゴのなさで振る舞った。

事実をまったく知らない一部の人々が、スティーブがマーク・ビッグロードから祭壇を受け取ったと主張していると嘘をでっち上げた。スティーブはそんなことは一言も言っていない。質問されたスティーブは「祭壇は持っていない。パイプを持ってきて、祈ってくれと言われたときに祈るだけだ。"

必要なかった薬師祭

スティーブと私の親しい友人の一人であるボブには、健康状態が悪化している娘がいた。医師たちはお手上げ状態で、原因が何なのかわからなかった。スティーブはボブを訪ね、ボブは重病の娘のためにメディスン・セレモニーをお願いしたいと告げた。そのスピリットはスウィフトと名乗り、すぐにスティーブに話しかけてきた。スティーブはそのメッセージをボブに伝えた。ガラガラのキャンディを食べるのをやめるように言ってくれれば大丈夫だ」。ボブは、ガラガラのキャ

ンディを食べるとはどういうことかと尋ねた。スティーブは見当もつかないと言ったが、スウィフトはそう言った。二人がその意味に戸惑っていると、別の部屋でガラガラを振るような音が聞こえた。すぐにドアを開けると、ボブの娘が砂糖でコーティングされたイブプロフェンの錠剤のボトルを手に持って、何錠か振っているのが見えた。ボブの娘がイブプロフェンの錠剤を口に入れる前に、二人は"やめて!"と言った。娘はイブプロフェンを一日に何度も服用していたことがわかった。テレビのコマーシャルを見ると、イブプロフェンはまったく無害のように思えたし、娘もイブプロフェンから何らかの恩恵を受けていると想像していた。医者が娘に薬物を服用しているかどうか尋ねると、娘はヘロインやコカインを思い浮かべ、「とんでもない!」と答えた。(と言った。) 彼女はイブプロフェンの服用を止め、体調はすぐに改善し、正常に戻った。

メディスン・ピープルからの教え

どのように信じるか

ワシントン大学で初めてフルズ・クロウ酋長に会ったとき、ある講演の中で、彼の通訳であるマシュー・キングが、フルズ・クロウ酋長は時々未来を予言することができるかと聴衆に話した。聴衆の誰かが、これから何が起こるのかと尋ねた。フルズクロウ酋長が答えると、マシュー・キングは「多くの死と破壊が起こる時が来る」と通訳した。その時に備えて何をすべきか、と誰かが質問した。フルズクロウ酋長は「祈りなさい!」と答えた。他の誰かが、「どのように祈るべきか?」と尋ねた。私はすぐに、フルズクロウ酋長が聖なるパイプを使って祈る方法を説明するのと思った。フルズクロウ酋長はこう答えた。「どのように信じてても、そのように祈りなさい!」。

フルズクロウ酋長がそのように答えたことに、私はとても驚いた。私の理解では、フルズクロウ酋長は彼の聴衆が受け入れているすべての宗教を肯定していた。多くの宗教を肯定したのは、フルズクロウ酋長だけではない。

車輪の上のスポーク

数年後、友人のロン・グッドマンが、ラコタのメディスン・ピープルの一人から聞いた教えを話してくれた。(彼はこの教えを伝えたメディスン・パーソンが誰なのか教えてくれたが、私はその人の名前を覚えていない)。

すべての宗教は車輪のスポークのようなものだ。それらはすべて創造主のいる聖なる中心に入ってくる。もしあなたがそのスポークの1本に乗っていて、外側に移動したら、誰が神聖で誰がそうでないかを気にするようになる。自分のスポークにしっかりしがみついていないと、スポークから外れてしまう。しかし、もしあなたが中心に移れば、愛と慈悲がすべてとなり、自分のスポークとのつながりを失うことなく、他のすべてのスポークを歩き回ることができる。

さまざまな宗教のこれらの検証を受け、私は学んだ宗教からの賢明な教えの多くを受け入れており、私の文章の中でそれらの賢明な教えに言及することがある。ある宗教からの賢明な教えに言及しない場合、それはその宗教に対する批判ではなく、私の経験と知識の限界を示しているにすぎない。

科学の棘

確かに科学の領域は、前述の車輪のスポークのひとつである。科学の"聖書"とは、私たちを取り巻く世界の思慮深い観察に基づく知識の蓄積である。

ユング心理学の謎から量子力学の謎に至るまで、科学の領域は答えを出すたびに何十もの新たな問いを私たちに投げかける。

イスラム教の教えのひとつに、二つの書物というものがある。第一の書物はコーランや聖書のようなすべての聖典を集めたものであり、第二の書物は私たちを取り巻く世界の書物である。どちらの書物もアッラー（神）によって創造されたものであり、私たちは皆、宗教的な書物だけでなく、私たちを取り巻く世界の書物、すなわち科学についても謹んで学ぶべきなのです。

6人の盲人が象に出会う

さまざまな宗教（科学を含む）の神学と哲学は、私たちの車輪の聖なる中心について、まったく異なる概念を私たちに与えてくれる。だからといって、私たちが理解しようとすることを妨げてはならない。私たちは皆、象に出会った盲人によく似ている。ある者は幹をつかみ、「象は大きなホースのようなものだ」と言う。ある者は象の牙をつかみ、「象は槍のようだ」と言う。ある者は象の脚を掴み、「象は木の幹のようだ」と言う。耳をつかんで言う。「象は大きな葉っぱのようだ」。尻尾をつかんで言う。「象はロープのようだ」。そして、象の横に手を置く男は言う。「象は壁のようだ」。

忍耐強く、過度に従順な象についての盲人たちの認識は、それぞれ事実であり正確であるが、象の本性はそれぞれの描写を超越している。私たちの輪の聖なる中心を理解しようとする試みがそうであるように。すべての記述を組み合わせることで、私たちの言葉や記述では理解しきれないものを理解することに少しは近づけるかもしれない。

ラコタ族には、創造主の意志に自らを開くために、「Haŋbléčeya（ハブレチェヤ）」と呼ばれる儀式がある。これは「幻を見るために泣く」と訳され、最大で4日間、食べ物も水も摂らずに断食する。これは通常、孤立した寂しい丘の上にある6フィート×6フィートの祭壇で、毛布、セイクリッド・パイプ、最小限の衣服で行われる。ラコタ族はしばしば「丘の上に行く」ことをビジョン・クエストの代名詞として口にした。丘の上に行く人は、願わくばすべての思考を沈黙させ、最悪の敵に打ち勝ち、エゴを死滅させ、創造主のスピリチュアルなガイダンスに自分自身を開放する機会なのだ。なぜなら、ヴィジョンを見たいと思う部分こそが、ヴィジョンを受け取るために絶対に死ななければならない部分だからです。これは仏教の瞑想修行とよく似ている。仏教の修行では、深い瞑想の実践を通じて悟りを開こうとするかもしれないが、悟りを開くためには、あらゆる欲望を完全に捨て去り、手放さなければならない。古いジョークにあるように、「ここからそこへは行けない」。

ホロー・ボーンズ

チーフ・フルズ・クロウは、メディスン・ピープルは空洞の骨のようなものだと教えた。そして、彼らが空であるからこそ、創造主の聖霊が彼らを通して人々を癒すことができるのです。

世界最悪の人物

フルズクロウ酋長の教えでは、世界最悪の人物（私の場合はヒトラーが思い浮かぶ）を考えた場合、その人物の場所に生まれ、その人物が育ってきたような経験をして育っていたら、私たちが違う結果になっていたかどうかはわからないという。人間には善悪の可能性があるので、悪い環境に置かれ、悪い選択をたくさんしていれば、残虐行為を犯していたかもしれない（私たちの中で悪い選択をしたことがない人はいないだろう）。この教えは、私たちが悪だと思ふ人よりも自分の方が正しいと考える罠に陥るのを防ぐのに役立つ。それは私たちだったかもしれない。

他人の宗教を批判しない

フルズクロウ酋長にとって特に重要だったのは、他人の宗教を批判したり悪く言ったりしないことだった。それは彼らと彼らの創造主との間のことであり、彼らが最善と考えるどのようなスピリチュアルな導きに従うかは彼ら次第だった。他の宗教的な慣習について話すとき、祖父は「Tǎkóža、（孫よ）私たちはパイプで祈るんだ！」と言うのだが、祖父が強調し、言及している「私たち」とは祖父の家族のことであり、祖父は私を祖父の家族の一員とみなし、祖父の指導に従う祖父の家族の者はパイプで祈るのだと、私は力強く感動的な気づきを得た。

最悪の敵

フルズ・クロウ酋長の4つの教えのうち、最も重要なものを最後に紹介しよう。マシュー・キングによると、フルズクロウ酋長がインディアン以外の聴衆と最

も頻繁に分ち合った教えであることに加え、彼自身の人々と最も頻繁に分ち合った教えは、「私たちは常に自分自身の最悪の敵であり、スピリチュアルな道とは、自分自身である最悪の敵と戦うことに尽きる」というものであった。この教えは、私たちを創造主に近づけ、現代社会に生きる結果として私たちがさらされ、浴びせられる妄想的な思考や信念から遠ざける過程において、中心的な役割を果たすものである。

分析

理由と正当性

メディスン・パーソンになりたいという願望は、ラコタ族の人々には常に愚かさの極みと見なされてきた。パワーを行使することを楽しもうとする私たちの一部分は、そのパワーを人を通して発揮する前に完全に死んで排除されなければならないからだ。しかし、病人や瀕死の愛する人のベッドの傍らに力なく座り、私たちの祈りが慰めや癒しや回復を与えてくれることを願った**ことのない人**がいるだろうか。

フランク・フルズ・クロウ、ドーソン・ノー・ホース、ロバート・ステッド、アグネス・ピルグリム（医学／スピリチュアルな力を持っていた、私の知っている愛すべき非常に謙虚な祖母）のような男性や女性を、創造主は**もっと増やしたいと願っている**のだと、私は揺るぎない信念を持っている。たとえそうするためには、私たちのエゴや膨れ上がった自尊心をかなり痛快に打ち砕く必要があるとしても。権力欲や望ましい報酬への期待からではなく、**義務感から**創造主に近づこうとすべきだと私は信じています。創造主に仕えるために最善を尽くすことは、私たち一人ひとりの責任であり、その中には、魂の暗闇に真実の光を照らすことを厭わない一方で、明るみに出たことに対しては自分自身を赦し、赦される覚悟を持つことも含まれる。謙虚さへの道は、私たちを屈辱の谷へと導く

さらに、この文章で説明されている方法は、たとえその方法を採用した人が薬になることに成功しなかったとしても、私たちの妄想を突き破り、はるかに高度な正気を促進するように設計されています。ひとつ確かなことは、創造主の聖なる臨在のもとでは、妄想的な思考や信念を維持することはできないということだ。もし、最初に私たち全員が抱いている妄想を打ち砕くという痛みを伴うプロセスを経たくないのであれば、誰もビジョン・クエストに行こうと考えるべきではありません。私たちの社会は、私たちがいかに素晴らしいかを嘘で塗り固めようとする（特に、何かを買わせようとするとき.....「あなたがいかに素晴らしいかによって、あなたはこの光り輝くものに値するのです！」

この後の分析は、エゴを解体し、独善を打ち壊し、墮落した本性の中に身を置き、**ヴィジョンを求めて涙を流し、創造主に近づく準備ができた**私たち自身と、あまりにも人間的な本性を慈しむように理解するためのものである。

この分析の一部が、煩雑で、反復的で、強引で、言葉が多すぎると思われるのであれば、申し訳ない。私は、人間の現状を完全に分析し、それをどのように克服し、どのような罨や落とし穴を避けなければならないかを提供するために、手を抜かないことを望んでいる。また、私たちの個性、自律性、の自由を打ち砕こうとする闇を照らす（戦うのではなく、照らすのだ）光の力が必要であり、私は緊急性を感じている。戦うべき戦いは私たちの内側にある！この内なる戦いに勝てば、外的な対立は暖かい晴れた日の雪のように溶けてなくなるだろう。

最悪の敵との戦い - 北極星

フルズ・クロウ酋長が自分の仲間に最も頻繁に伝えていた教えは、"私たちは常に自分自身の最大の敵であり、スピリチュアル・パスとは、自分自身という最大の敵と戦うことである"というものだった。私は50年もの間、私と分かち合ったすべての教えをより深く理解しようと努めてきたが、フルズ・クロウ酋長が最も頻繁に分かち合った教えが、なぜこの言葉だったのかを理解するようになった。スピリチュアル・パスを理解し、創造主に近づくために人間が最悪の敵に打ち

勝つにはどうすればよいかを追求すればするほど、その理解はこの教えの重要性を指し示すようになり、この教えは私の北極星となった。私たちが最悪の敵と戦うとき、カール・ロジャーの「**無条件の肯定的尊重**」（**無条件の愛**という別の言い方）の鎧を自分自身に使うことが不可欠です、自分の過ちや欠点にもかかわらず、私たちは愛すべき存在であり、愛されている！

フールス・クロウ酋長が最も頻繁に語った教えは、イエスが最も頻繁に民衆に語った教えと根本的に同じである。

若い頃、新約聖書を読み始めて、イエスが頻繁に人々に悔い改めを求めていることに驚いた。私は、"イエスは確かに裁く人だ"と思った。数年後、私はイエスが人々に罪の意識、恥、裁き、非難をもたらそうとしていたのではなく、赦しと許しを意識させようとしていたのだと知った。しかし、私たちが赦され、許しを得ることができるのは、私たち自身が完全に自覚し、自分自身の中にある罪や過ちを完全に認め、立ち向かった場合に限られるということを理解することが極めて重要である。創造主の全知全能の愛の灼熱の光は、私たちの最も深く暗い腐敗を完全に暴露し、それをきれいに洗い流し、純粹で新しいものにしなければなりません。**裁きと非難は**、（すべての人間が持っている）腐敗した部分を暴き、立ち向かい、赦されることを拒むときに、**私たちが自分自身に対して行うもの**です。

預言者モハメッド（かれに平安あれ）は、戦いから帰還したとき、戦士たちから次のジハードは何かと問われ、こう答えたと言われている。私たちが他者と戦う（闘う）戦争はより小さなジハードであり、より大きく重要なジハードは自分自身との闘いである（私たちの最悪の敵との闘い）。

他者を知ることは知恵である；

自己を知ることは悟りである。

他者を使いこなすには力が必要だ；

自己を極めるには力が必要である。 -道経 第33章

己の内なる敵に打ち勝つまでは
 自分の中の敵を征服するまでは、
 なぜなら、外敵はほとんどの場合
 というのも、外部の敵はほとんど必ず、内部の敵の反映にすぎないからだ。

「自分の闇を知ることは、他人の闇に対処する最善の方法である。 - カール・ユング

"自分の心を見つめることができたときにのみ、あなたのビジョンは明確になる。
 外を見る者は夢を見、内を見る者は目覚める。"- カール・ユング

「無意識を意識化するまでは、無意識があなたの人生を支配し、あなたはそれを
 運命と呼ぶだろう。 -カール・ユング

「人は光の姿を想像することによって悟りを開くのではなく、暗闇を意識化する
 ことによって悟りを開くのである。-カール・ユング

確証バイアス

私たちの最大の敵の本質を知る手段として、確証バイアスという現象を考えてみよう：

私たち人間は、自分が正しいことを発見することで大きな喜びと満足感を得る（間違っていることが明らかになると嫌な気分になりがちなのは対照的だ）。私たちは、自分の**バイアスを確認する**情報に気づき、それに注目する一方で、自分が間違っていることを示すような情報には気づかない傾向がある。間違っていたことを発見するのは不快で憂鬱なことであり、人間は憂鬱な気分になるのを避けたいと強く願うため、気分が悪くなるような情報は簡単に無視してしまうのである。この確証バイアスの現象が、理論的な科学的努力において査読プロセスが非常に重要である理由である。私たちを取り巻く世界のある特徴を説明するために、新しく斬新な理論を考え出した科学者は、その理論を裏付ける証拠とともに研究論文にまとめ、その分野の専門家に提出する。専門家は、科学者の興奮や熱意

によって、その理論と矛盾したり反証したりする証拠を見落としてしまうことがないように、**公平**にその主張を検討することができる。

ある意味、それは私たち全員と同じだ。私たちは自分自身を表現するために言葉を使い、自分がとる行動のすべてを、自己概念という形で自分自身に説明する。私たちは、**自分が**自分自身に語る物語の**主人公となる**ような、自分自身についての理論や理解を深めていく。私たちは、自分が善の側にいることを望む。この理論や物語は、私たちが自分自身を良く感じ、自尊心を高めるのに役立つ。もし疑わしい行動をとれば、英雄的な自己イメージが損なわれないように、その行動を合理化し、自分自身に正当化する方法を見つける。その過程で、疑わしい行動をとるように仕向けた原始的な反社会的欲求を意識から隠してしまうのだ。私たちは（間違っではいるが）、自分自身の正義と英雄的性質を強く信じていれば、周囲の人たちは、私たちが自分自身を見たいように、愛され、社会的集団に含まれ、その集団の中で正しい高評価を受けるに値する存在として、私たちを見てくれるだろうという生得的な感覚を持っている。ジークムント・フロイトが"エゴ"と呼んだのは、私たちが自分自身についてどうしても信じたいこの物語であり、フロイトが"イド"と呼んだのは、私たちがその存在をどうしても否定したい原始的な反社会的欲望である。私たちは、自分自身から隠しているこの部分を「悪」と認識し、「悪」に関わりたくないがために、その影響が私たちの行動に及んでいることを認めることも、自覚することもできない。

一見したところ、フルズクロウが私たちに戦わせようとしている敵は、イエスが悔い改める必要があると言っている自分自身の一部であり、モハメッドによれば私たちが苦闘している部分であり、老子によれば私たちがマスターする必要があるのは、イドの原始的な反社会的欲望であると思うかもしれないが、**そうではない**。本当の敵は、原始的な反社会的欲望からの**分離**であり、それは言語、自己概念、確証バイアスの機能である。

橋の作り方

私たちの原始的な反社会的欲求を理解するための架け橋となるには、その進化的起源を考える必要がある。そうすれば、こうした原始的な反社会的欲求は、私たちの種の存続にとって不可欠なものであったことを認識できるだろう。このような欲望が存在しなければ、私たちはここにいないのだから、（他の人たちと同じように）焼き付いた、避けられない反社会的な欲望を抱いている自分を大目に見て、許すことを学ぶ正当な理由があるのだ。最も深い真実は、私たちから隠されているのではなく、私たちによって隠されているのだ。

生存動機の進化

食べる、動く、繁殖する

この惑星で生命が誕生したとき、最初の単一細胞は化学的な動機づけによって、栄養を消費し（第一の、そして最初の生存動機--私たちは食べなければならない！）、細胞分裂（自分自身を2つに分けること--生殖--第二の生存動機）を行った。やがて、細胞は鞭毛を進化させた。鞭毛は、細胞がより有利な生存条件（より密度の高い栄養素、おそらくより有利な温度、あるいはその他の有利な条件）に向かって移動することを可能にする付属器官である。そして第三の生存動機は、生存のチャンスを増やすために移動することだった。

最初の3つの生存動機は、生命が単細胞を超えて進化する前から備わっていた。私たちは食べ物を消費し、食べ物を得るために動き、快適に過ごすために動き、そして繁殖を求める。

領土を守る

生命が神経系と脳を持つ多細胞生物に進化した後、生存の動機はより知的になった。海洋での生活から乾いた陸地へと進化した生物は、生存を確保する手段として、栄養源を守り抜くことを学んだ。こうして動物たちは縄張り本能と行動を進

化させ、食料の供給源である縄張りを、たとえ**同種の動物からであっても**守ろうとするようになった。必要な栄養を供給するのに十分な広さの領域を守ろうとする**縄張り本能**は、第4の生存動機である。縄張り意識を持つ生物の生存は、同種の他者から食料供給を守り抜く能力に依存していた。彼らは社会で生活していなかったため、同種の他者を容認することを義務づける社会契約はなく、ましてや協力したり分かち合ったりすることはなかった。そのため、侵入してきたライバルを殺すことは、個体と種の存続のために必要だった。テリトリーのダイナミズムを理解する上で、現代のトラを考えてみよう。トラが他のトラの縄張りに侵入し、殺したばかりの小動物を運んでいた場合、縄張りを侵されたトラは侵入してきたトラを殺し、運んでいた獲物を奪う。社会性を重視する私たちの種から見れば、それは殺人や窃盗にあたるが、私たちの判断は、協力的に生活し、殺人や窃盗は悪いことであり、社会的契約の違反であるという社会的／倫理的契約を守っている人々から見たものである。トラのような純粋に縄張りを持つ種には社会契約がないだけでなく、彼らの生存（）と種の存続は、そのような侵入者から縄張りを守る能力に依存している。トラや他の非社会的縄張り種にとって、種の存続は存在しない社会契約よりも優先される。利己主義、自己中心的、貪欲といった概念は、社会で暮らす私たちにとって否定的な意味合いを持つが、遠い昔の非社会的で縄張り意識の強い祖先にとっては、生存のための有効なプログラムであったとも考えられる。

社会的動機と領土的動機の融合

第五の生存動機は社会的動機である。その強さは、互いに支え合う個体の集団の方が、交尾した1対の個体よりもはるかに広いテリトリーを守ることができ、生存の可能性が高いという事実に基づいている。これはおそらく、狩猟や採集に参加させるために子孫を残しておくことが有利になったことから始まったのだろう。つまり、家族集団が形成され、それが非常に大きな拡大家族／共同体へと成長したのである。その結果、領土的な生存動機は捨て去られ、より効率的な社会的動機と、全構成員を養う普遍的な集団がもたらす安全と安心が優先されるべきだと

論理的に理解されるようになったはずだ。しかし、何億世代にもわたる縄張りの本能／動機は、原始的な縄張りの動機を捨てて社会的な動機を優先させることの利点を理解する言語能力や理解力に欠ける生き物には、そう簡単に手放すことはできない。

潜在的な領土的動機

私たちに最も近い遺伝的親戚であるチンパンジーの行動を調べると、縄張り意識と社会的生存動機が融合していることがわかる。チンパンジーの群れは社会的にお互いを支え合うが、オスのチンパンジーは縄張りの境界をパトロールして守る。その縄張りに外国のチンパンジーが侵入しようとする、恐怖、怒り、攻撃、憎悪を連想させる行動が支配的になり、侵入者は追い払われるか殺される。隣の群れのテリトリーに近づきすぎた群れのメンバーが殺されるか、傷で死ぬほどの重傷を負うかもしれないという事実は、パトロール中のオスが侵入者を容赦なく扱うという決意をさらに強め、反感をエスカレートさせるだろう。もちろん、多くのチンパンジーの群れが生息する広いジャングルでは、チンパンジーが縄張り意識を捨て、種全体の相互扶助の共同体を受け入れることができれば、すべてのチンパンジーの生存の可能性は著しく高まるだろう。しかし残念なことに、何十億世代にもわたる縄張り意識による生存動機のプログラミング、部隊間の反目という記憶された歴史、そして縄張り意識の逆効果という性質を理解できないことが、それを阻んでいる。

自らの中にある領土的動機と向き合う

私たち自身の種を鏡に映して考えてみると、縄張り意識と社会的生存動機が同じように混ざり合っていることがわかる。

縄張りの動機を原始的な生存動機の文脈で検討することの要点は、私たちが自分自身の中にあるこれらの原始的な感情を、深く罪悪感を感じるべき個人的な失敗としてではなく、むしろ私たちの理性と理解（そして私たちの開かれた心）が克服することを可能にする、受け継がれた動機として検討し、理解し、見ることが

できるようにすることである。私たちの原始的な縄張り意識は、私たちに、自分たちの社会の一員（私たちが親近感を抱くことができる人々）か、あるいは「他者」、つまり私たちが脅威と感じる自分たちや自分たちの種族以外の人々のどちらかに人を分類させる。私たちの生存や家族、地域社会の存続を脅かす脅威に直面したとき、適切と思われるわかりやすい反応は、脅威と認識した相手に対する恐怖、怒り、攻撃、憎悪である。米国では、わが国でより良い生活を得ようとする貧しい移民を恐れる者が多く、こうした「他者」からわが国の領土を守るために必死に壁を築こうとしたり、逮捕して収容所に入れ、強制送還しようとしたりする者もいる。移民はわれわれの仕事を奪い、それによってわれわれの家族とわれわれ自身を養う能力を奪い、われわれの生存を脅かすためにやってくるというのが、よく言われることだ。こうした主張は、親から引き離され、檻に入れられ、何週間も風呂に入れられない子どもたちを含め、移民を非人間的に扱い、拷問し、虐待する口実として使われる。肌の色、民族的アイデンティティ、言語、宗教、政治的信条、社会経済的階層が異なることを理由に、人々を「他者」として分類する人たちもいる。私たちが「他者」とみなす人々に対する恐怖、怒り、攻撃性、憎悪といった反応はすべて、私たちの潜在的な縄張り意識に起因するものであることは明らかだ。記憶を探れば、脅威と感じた集団に対して感じた恐怖の名残を、誰もがみつけることができる。政治指導者が攻撃性を示し、憎悪を煽り、分断を縫い、以前は違いがあっても互いに容認し、不承不承協力し合っていた政治集団の間に敵愾心を抱かせることが流行っている。派閥的な憎しみや領土的な怒り、恐怖心をあおることでグループを積極的に分裂させることで、彼らが強く見え、平和主義者や団結主義者は弱く見えるという考え方もある。もちろん、それは正反対である。通路を越えて平和的に手を差し伸べる団結者こそが数の力を生み出し、分裂者は私たちに弱体化させる。真の強さは、攻撃性、怒り、憎しみ、分裂にあるのではなく、自制心、決意、共通点を見つけること、敵対する人々と協力することを学ぶことにある。

私たちが戦う戦争は、常に私たちの潜在的な領土的動機によって引き起こされる。1902年、イギリスの詩人トマス・ハーディはこう書いた、

「もし彼と私が
古い宿屋で
私たちは座って濡らしていただろう
"多くのニッパキンを [小さなグラス]

しかし、歩兵としての射撃、
顔を見合わせながら
私は彼が私を撃ったように彼を撃った、
そして、その場で彼を殺した。"

…
…

"そうだ。戦争は古風で不思議なものだ！

"そうだ。

"酒場で出会ったら、あなたはもてなすだろう、

"あるいは半クラウンを助ける。"

私たちは、原始的な反社会的領土的動機が悪であると認識している。ヒトラーの悪は、ナチス信奉者たちに、ユダヤ人、ジプシー、カトリックなどの「他者」は悪であり、ドイツの存続を脅かす存在であり、したがって怒り、憎しみ、非人間化、大量虐殺に値すると信じ込ませたという点で、領土的動機から生まれた。自分自身を善人として見たいと願う私たちは、こうした原始的な反社会的欲望を意識から隠している。善と悪は、私たちが認識している自分自身の部分と、自分自身から隠している**部分とを**分ける境界線となるため、倫理を理解することは、私たちが自分自身の隠された部分を許し、受け入れるために不可欠なのである。

サバイバル - 究極の倫理的要請

進化の機能としての倫理

チャールズ・ダーウィンが著書『自然淘汰による種の起源』で説いた進化論は、最初の単細胞から現代の人類に至るまで、この地球上の生命の進化と、ある種がどのように適応して生き残る一方で、ある種がどのように適応できずに絶滅するかについての洞察を与えてくれる。

進化のダイナミズムにおいて、各世代は試練に直面する。状況の変化に適応して数が増え、繁栄するのか、それとも適応に失敗して数が減り、絶滅に向かうのか。ある種が絶滅に至れば、そこで終わりである。悲しいことに、やり直しや2度目のチャンスはない。私たち人類は、何千億世代にもわたる競争的進化の産物であることを肝に銘じておくべきである。私たちは食物連鎖の一部であり、捕食者や寄生虫に食べられないようにしながら、他の動植物種（そのほとんどは自分が食べられないように進化した）を食べることで栄養を得ているという意味で競争的である。私たち、そして最初の細胞までさかのぼる私たちの祖先は、天候、干ばつ、飢饉、病気、捕食者、寄生虫など、私たちの生存を脅かすさまざまな試練にさらされてきた。そして、直面したあらゆる試練にもかかわらず、私たちは見事に適応し、生き残り、繁栄してきた。

私たち人間は、何十億世代にもわたる進化によって、極めて効率的な生存マシンとなるよう**プログラムされてきた**。生存は、私たちの原始的な倫理的要請である。

私たちが自分自身を理解する上で重要なのは、私たちがこの上なく成功し、極めて**よくプログラムされた生存機械**であるという事実を受け入れることである。私たちの課題は、進化が私たちに組み込んだプログラミングを完全に理解し、潜在的な縄張

り意識や恐怖心など、私たちが気づかないところでプログラミングに支配されるのではなく、意識的にプログラミングをコントロールできるようになることである

私たちの幸福、悲しみ、喜び、恐れ、そして特に欲望はすべて、私たちが生き残るために進化した内部プログラミングの動機づけの側面である。喉が渴けば水を欲し、喉の渴きが不快になれば水を求めるようになる。

狩猟や採集を助けるために子孫を残すことの利点を認識し、拡大家族や共同体の形成につながった進化的プログラミングは、共同体での生活をもたらす安全や安心への欲求と、他人のニーズを無視して利用可能な食料をすべて自分のものにしたという利己的な縄張り意識との間に葛藤を生み出した。言語が発達する以前の私たちの祖先は、家族や共同体から追い出されないためには、縄張り意識を無視する必要があることを理解していたはずだ。

倫理とは、「自分がされたくないように他人を扱うべきではない」という考え方に基づき、社会の他のメンバーとの相互作用に意識的に適用するルールや原則のことである。互いに支え合うという互惠性は、社会の中で生活する方が領土内で生活するよりも生存を確保する上で効率的であるという基本原則である。私たちは、殺されたり、財産を盗まれたり、だまされたり、だまされたり、嘘をつかれたりすることを望まない。なぜなら、そのような行為は私たちの生命を脅かし、安全、安心、帰属意識を低下させるからであり、私たちが共同体の一員として受け入れてもらいたいと切望している他者に対して、そのような行為をしてはならないのである。

生き残ること（適応し、繁栄すること）は、私たちが最も得意とすることであり、私たちはそれで成功してきたため、豊かな環境で暮らす私たちは、生き残るための基本的なニーズを当然のことと考えている。

アブラハム・マズローの欲求階層説

アメリカの心理学者アブラハム・マズローは、人間の動機は欲求の階層に分類できると理論化した。このヒエラルキーの基礎となるのは、十分な食料、水、シェルター、暖かさといった生理的欲求である。これらのどれが欠けても、個人はそれらを得ることに集中する。次に、安全と安心、所属と愛、社会的欲求と自尊心、自己実現、そして超越と続く。自己実現、愛、超越という上位の目標に集中するためには、まず下位の欲求を満たす必要がある。**生きていくのに十分なものがあり、これからも十分なものがあることを知る必要がある。**そうすれば、繁栄、繁栄、自己実現、愛、超越に目を向けることができる。

豊かな環境にいる私たちは、アブラハム・マズローの欲求階層説ではかなり上位に位置し、食料、水、シェルター、安全、安心の確保という生理的欲求はかなりカバーされているため、それらを当然のこととして受け止め、基本的な生存から繁栄、栄華へと関心の焦点を移すことができる。アリストテレスの倫理学では、エウダイモニアを達成すべき善と定義している。アブラハム・マズローは、基本的な生存欲求が満たされていて問題がないからこそ、アリストテレスはエウダイモニア（幸福、繁栄、栄華）に注意を向けることができたのだと指摘するだろう。

私たちが倫理哲学の中で「善」と位置づけ、重要視するものの中で、生存は（疑いの余地がない場合でも）欠くことのできない基盤であると考えべきである。地球上の生命の生存、そして人類という種の生存に勝る善はない。殺人をしない、盗みをしない、不正行為をしない、嘘をつかない（カントの定言命法）など、私たちが従う社会的倫理規範はすべて、私たちの安全と安心を高めるためのものであり、最終的には究極の原始的な要請である生存を保証するのに役立つ。

社会が形成される動機となった安全、安心、生存の可能性の増大は、私たちが潜在的に持っている原始的な縄張り意識がそうさせるように、社会の構成員が互い

に殺し合ったり奪い合ったりするのではなく、互いに協力し合うことを必要とした。

どのような倫理的理解も、そのような理解が可能な存在の生存と存在に依存している。私たちの倫理的戒律はすべて、私たちの快適さ、安全、そして究極的には生存を保証するという目的を果たすものである。

社会的生存の原動力は、私たちの縄張り意識が、共同体での生活をもたらす安心感や安全性を優先させた結果、倫理的な拘束力を生み出したのである。だからこそ、倫理は社会的生存動機の機能であり、進化の機能なのである。

私たちの種の進化における明らかな次のステップは、私たちがある集団を「他者」とみなし、私たちの生存を脅かす存在とみなしている、私たちの本性に潜在する縄張り意識の部分を完全に認識し、完全にコントロールし、意識的かつ意図的に無視できるようになることである。もしそうすることができれば、すべての戦争は飢餓や栄養失調とともに終わるだろう。

すべて、私の関係者たちよ

ラコタ族が共有した最も深い知恵のひとつは、キリスト教徒が「アーメン」という言葉を使うのと同じように、ラコタ族が祈りの最後に使う言葉やフレーズである。そのフレーズとは、**Mitákuye** 「ミー・ター・キー・ヤース・イーーン」というおおよその発音に略されることが多い) である。この祈りは、それ自体が完全な祈りであり、私たちが地球上のすべての人と関係があること、彼らは私たちの親戚であり、そのように扱われる価値があることを認めています。それ以上に、この地球上の他のすべての生命との関係、そしてすべての生命を誕生させた地球そのものとの関係を認めています。ラコタ族は、科学者たちが200年も前に解明したこと、つまり私たちがこの惑星上のすべての生物と（細胞遺伝学を通じて）親戚関係にあることを、常に知っていた。動植物はみな、私たちの最も遠いところであり、地球は私たちの究極の母なのだ。これらはスピリチュアルで宗教的な

言葉のように聞こえるが（ラコタ族にとってはそうである）、純粹で厳然たる科学的事実でもある。

フードチェーンへの依存

各生物種の生存は、食物連鎖の存在に完全に依存しているため（私たちの食料は食料品店で調達されるわけではない）、食物連鎖に含まれるすべての生物種の生存（）を可能にする環境に依存している。生存という究極の倫理的要請は、私たちの生物種がその一部である生態系全体の生存により広く適用されると理解すべきである。究極の愚かさや近視眼は、私たちを支え、私たちの生存が依存している生態系の健康と幸福に関心を持たないことである。

言葉の果実

言葉を持たなかった私たちの祖先は、互いに協力し合い、狩猟や採集で得た恵みを分かち合うことの利点と必要性を感じていた。彼らは、社会性を獲得する前の縄張り意識から生まれた、集めた食料をすべて自分のものにしたいという利己的な欲求も持っていたにもかかわらず、このような行動をとったのである。おそらくは、凶々しくも食料を独り占めしようとする別のメンバーを、集団の一員として集団でどう扱うかという意識があったのだろう。生まれながらにして糧を得、安心と安全の感覚を得てきた集団から追放されることは、敬虔なまでに恐れるべき死刑宣告である。**重要なのは、言葉を持たなかった先住者たちは、食料を独り占めしたいという縄張り欲を十分に自覚し、その欲望に触れながらも、共同体の一員であり続けたいというより大きな欲望とのバランスをとることができ、その結果、縄張り欲を抑制することができたということである。**

私たちの祖先が過去形と未来形を持つ複雑な言語を作り出したとき、私たちの経験と現実の認識は完全に変わった。私たちは、言語の定義、概念、アイデアを通して周囲の世界を見るようになった。初めて、私たちは出来事の記憶を記録し、その記憶を時間に関する理解の構造に落とし込むことができるようになった。私たちの記憶は、あたかも写真画像の乱雑な山であったが、今では年代順と関連す

るテーマ別に並べられたかのようなものである。私たちの記憶は、単なるイメージや感情ではなく、言葉や概念で定義されるようになり、より永続的で意味のある、伝達可能なものとなった。もし誰かが社会的モラルに反して、弱い立場の人の食べ物や道具を強奪し、盗んだとしたら、弱い立場の被害者は、何が起こったのか、何が奪われたのか、いつ、どこで、誰に奪われたのか、詳細にその犯罪を地域社会に説明することができる。

もちろん、私たちは世界や周囲の人々についての定義を作っただけでなく、自分自身についての定義も作った。**私たちは自分自身に対して、善良であり、コミュニティの中で善良で、できれば高い地位にあるメンバーである価値があると定義した。**そうすることで、私たちは縄張り意識の名残である原始的な欲望があり、それを意識することはできるが、その影響を無視することができることを認識するのではなく、言語（）由来の自己概念からそれらを除外することで、意識からそれらの欲望を隠した。意識から隠したからといって、欲望がなくなるわけではない。それどころか、欲望に力を与えた。私たちが言語ベースの意識的な選択をすることなく、欲望が私たちの行動に影響を与えることを可能にしたのだ。私たちは自分の行動の理由を考えずに行動し、後になってその行動の正当性を考えることがある。私たちが自分自身の善良さや正しさを確信するために言葉を使えば使うほど、私たちの中に隠された原始的な縄張り意識に基づく反社会的な欲望はより暗く、より邪悪になっていく。私たちの原始的な反社会的欲望が悪になる唯一の理由は、私たちがそれを意識から隠しているからであることは明らかである。社会で生き方がはるかに生存の可能性が高いため、その欲望を調べたり、その欲望に突き動かされないことを意識的に選択したりする代わりに、私たちがその影響力を意識的に認識することを妨げているからこそ、私たちの行動により大きな影響力を与えるのである。古代の縄張り意識による生存プログラミングは、いまだに私たちの行動に影響を与えているのだ。

言葉の果実 - 原罪

この理解は、聖書やトーラーが語る「原罪」についての新たな洞察を与えてくれる。原罪とは、**善悪の知識**である禁断の木の実を食べたことである。創世記2:19でアダムは動物に名前をつけたが、これは言語の創造を明確に指している。言語の果実のひとつは、私たちが**自分自身を善として定義**し始めたことであり、それによって、私たちが**悪として定義**し、その存在を熱烈に否定したいと願った、無自覚な原始的、縄張りの、反社会的な欲望から切り離されるようになったことである。これがエゴとイドの創造である。言語が創造され、それが自分自身を理解するのに適用されることで、私たちは**善と悪の知識**に到達した。つまり、原罪とはエゴの創造であり、エゴは今も私たちに影響を及ぼしているのである。このように考えると、原罪の物語は聖書の他の部分への導入となる。エゴの創造こそが克服すべき原罪であり、聖書の残りの部分は、エゴを克服し、原罪である分離を元に戻す方法についての指南書なのである。聖書は、他の多くの宗教書とともに、私たちの最大の敵である自己を克服する方法を教えている。原罪についての物語は、聖書やタナフの中で最も深く、最も奥深い教えかもしれない。

宗教テキストの社会学的意図

神が聖書（あるいはその他の宗教的テキスト）の創造に神の靈感を与えたと信じるか、あるいは聖書やその他の宗教的テキストが信じられないほど賢い人間の作品であると信じるかにかかわらず（神や神を信じない場合）、私たちは宗教的テキストの社会学的意図を考えることができる。私たちの宗教的テキストが私たちに提供するガイダンスの全体的な意図は何ですか？

この質問に対する答え、そして**この文章を書いた意図は、私たちの種が自己破壊的でない前向きな進化を遂げるよう、私たちを導くことである。私たちが最悪の敵（エゴ）を打ち負かし、潜在的な縄張りの動機づけの影響力を含む、私たちに組み込まれた動機づけのプログラミングを完全に意識的にコントロールできるようになったときに起こりうる進化の飛躍と解放は、私たちが想像すらできない**

ような方法で私たちを変容させ、力を与えてくれるでしょう。これこそが、私たちが求める究極の善であり、ゴールな

この文章では、主にラコタ族の宗教的実践とイエスの教えの2つの宗教的実践について論じている（キリスト教やキリスト教という言葉を使うのをためらうのは、キリスト教徒であると主張し、イエスの教えに従うと主張する人々の行動が、イエスの教えとは正反対である例があまりにも多いからである。）この2つの宗教的実践については、筆者（私）がこれらの教えに精通しているため、他の宗教的実践よりも多く取り上げている。この文章で論じられるかどうかにかかわらず、私たちの種の肯定的で非自己破壊的な進化の進歩に人々を向かわせる宗教的実践はすべて、真の本物の宗教である。

社会化尺度

縄張り意識が強く、非社会的で、純粹に利己的なトラガスケールの一方の端にあり、完全に社会化され、無私無欲なアリやハチがスケールの反対の端にあるような社会化のスケールで、私たち人間の種を考えると（蜜を集め、集めた蜜の残りを巣に持ち帰る前に、個人的な蜜の隠し場所を確保するハチはこれまで観察されていない）、私たち人間はスケールの中間のどこかにいることがわかる。私たちは生存に有利な社会的共同体の一員でありたいと願っているが、一方で個人の自律性と自由を重んじ、強制されたり、強要されたり、あるいは非自発的な蜂の巣／集団意識は、極端に言えば恐ろしく、望ましくないと感じている。私たちの課題は、自由と自律性を失うことなく、より社会化された部分へと自発的に向かっていくことである。

二つの黄金律、そして低次と高次の倫理の物語

クリスチャンはイエスの黄金律を知っている。イエスの黄金律が、もうひとつの黄金律であるヒレルの黄金律に倣い、それを改良したものであることを知る人は少ない。

ヒレルは賢明なユダヤ教の教師であり、イエスが生まれたときには非常に高齢であったかもしれないし、イエスの誕生前に他界していたかもしれない。時期は不明である。

ある異邦人（非ユダヤ人）がエルサレムの神殿に赴き、祭司長たちに知的挑戦を挑んだ。彼は片足でバランスを取りながら、律法の全文を彼に説明するよう求めた。祭司長たちは彼の挑戦的な態度にとまどい、彼を神殿から追い出した。ヒレルは言った。「あなたにとって憎むべきことは、あなたの同胞にもしてはならない。それが律法のすべてであり、残りは注釈である。これは「自分がされたくないことを人にするな」と言い換えられるようになり、ヒレルの黄金律として知られるようになった。ヒレルの返答は非常に簡潔で、賢く、覚えやすく、話しやすかったので、この話と教えはユダヤ人の間で急速に広まった。イエスは成長する過程でこの話を聞き、ヒレルの黄金律に親しんだに違いない。イエスの黄金律は、ヒレルの黄金律を単に模倣したものでも、巧みに言い換えたものでもない。イエスの黄金律は、より高い倫理基準を表しているのだ。このことを理解するためには、私たちが個人的に関与していない例を考えることが役に立つ：

子供たちを他の子供たちと遊ばせるとき、私たちは2つの倫理的ガイドラインを与える。第一に、厳格なルールである：他の子供たちを叩いたり、蹴ったり、唾を吐いたり、侮辱的な名前を呼んだり、意図的に残酷なことをしてはならない。これらは、自分がされて嫌なことは人にもしないというヒレルの黄金律を表している。これらのルールは義務であり、譲れないものである。違反した子どもは罰せられることが予想される。このルールは、社会が機能するために必要な基本的な倫理基準であり、意図的に互いを傷つけたり、自分がされたくない方法で他人を扱ってはならないということを表している。次に、向上心のある倫理的ガイドラインである。他の子供たちと仲良くしなさい。自分のおもちゃを他の子と分け合いましょう。滑り台に登るときは、自分の前に行かせてあげなさい。他の子供たちが楽しんでいることを確認しなさい。他の子どもたちを愛しなさい。自分がされたいように、他の子供たちにも接しなさい。"この任意のアドバイスに従うほど

賢明な子供は、自分のことを本当に好きで、忠実な友達になりたいと思っている子供たちに囲まれていることに気づくだろう。あなたのことが本当に好きで、あなたと一緒に過ごしたいと思っている他の子供たちの忠実な友情は、どんなに良いおもちゃよりもずっと貴重で満足のいくものです。イエスの黄金律とは、自分のこと以上に他人を愛し、思いやることである。自分の欲望を捨て、代わりに人に仕えることで、自分の欲望がすべて満たされるのだ。自分の幸福に関心を持たず、その代わりに他者の幸福（愛）に関心と行動を向けることで、自分の利己的な欲求や願望だけに関心を持つよりもはるかに効果的に、すべての欲求が満たされるというのは論理的とは思えないが、深く真実である。この教えを強制することはできない。なぜなら、たとえ子供がそれに従ったとしても、自分が本当に好きな人とおもちゃを分かち合う喜びを他の子供に示すことなく、また愛もなく、不承不承にそうしてしまうからである。私たちは愛することを**選択しなければならぬ**。そうでなければ、それは愛ではない。愛とは、抑圧、服従、従順から生まれるものであって、心の喜びから生まれるものではない。ヒレルの黄金律とイエスの黄金律の違いは、ユダヤ教の教えとキリスト教の啓示の違いである。旧約聖書と新約聖書の違いである。**自分の欲望を無視し、他者に奉仕する生き方をすることで、すべての欲望が最もよく満たされるという認識である**。このことは、利己的で利己的な人々すべてが、自分がされたくないことは他人にはしないという基本的な倫理規範を守る社会と、一人ひとりが無私の心で、自分の欲求よりも他人の欲求を気にかけて、周囲のすべての人々に奉仕する社会との違いを考えれば明らかである。

倫理理解の再定義の必要性

「解き放たれた原子の力は、私たちの思考様式を除いてすべてを変えてしまった。-アルベルト・アインシュタイン

イマヌエル・カントは、定言命法（人は殺してはならない、盗んではならない、嘘をついてはならないなど）を、こうした倫理戒律の普遍性に基づいて提唱した。彼はまた、他の人間をそれ自体が目的ではなく、手段として利用することを問

題視した。カントの倫理理論の究極的な根拠が、ヒレルの黄金律と大きく異なるかどうか、また、注意力の足りない哲学生が、片足でバランスを取りながらイマヌエル・カントに倫理哲学の説明を求めた場合、ヒレルの黄金律のように簡潔な要約が得られるかどうか、疑問に思うかもしれない。私は、カントが普遍化可能性と人々をそれ自体で目的として扱うという原則に到達した、その素晴らしく深い論理的根拠を否定するつもりはなく、これらの原則がヒレルの黄金律に包含されていることを指摘したいのである。

カントもヒレルも、人間が社会で共に生きるための最低限の倫理基準として、基本的な倫理理論を提示しているが、戦争や紛争の原因となっている潜在的な縄張り意識の問題には触れていない。人類にとって最大の脅威が、核兵器の時代における「私たちの思考様式」から生じていることを考えると、究極の倫理的要請である種の存続は、私たちの本性に深く埋もれている潜在的な領土的部分を認識し、領土的部分が私たちに及ぼす影響を意識的に無視することを選択できるかどうかにかかっているのかもしれない。核をめぐる状況は、本性の領土的部分を克服して進化するか、あるいは自滅するかという最後通告へと私たちを突き動かしている。賢明な選択をすることを願おう！

不可能に見える倫理的挑戦

私たちがイエスの黄金律を受け入れることは難しいが、それ以上に難しい倫理的挑戦が、敵を愛し、私たちに悪いことをした者に善を行えというイエスの命令にある。この倫理的な命令によって、イエスは私たちに、認識された敵を定義し、特定し、敵から身を守ろうとする私たちの縄張り意識を捨て、それに影響されないよう、自覚を得るよう直接的に挑んでいるのだ。もしチンパンジーが私たちの言葉を理解したなら、私たちがチンパンジーのさまざまな部隊に与えるであろうアドバイス、つまり、すべての部隊をひとつにまとめ、不必要な防衛的縄張り意識を捨てれば、生存の可能性が高まるというアドバイスを、イエスは私たちに与えているのだ。

謙遜への険しい道

最もパワフルなスー族のメディスン・ピープルについて最も優れていた点は、彼らには何も優れているところがなかったということだ。彼らは、私がこれまでに会った中で最も謙虚で、最も控えめな人々だった。彼らは輝くことも目立つこともなかった。鈍いのだ。カリスマ性があるわけでもなく、むしろ控えめだった。彼らは決して自慢したり、自分の中にある力を誇ったりしなかった。フランク・フルズ・クロウが表現したように、彼らは空洞の骨だった。私たちがエゴの欲望で満たされているのに対し、彼らは空っぽなのだ。静かな時に彼らを見ても、輝きはない。内なる光に満たされていない。たいていの場合、彼らはいつも泣きそうになっているように見える。空虚さの中に座りながら、いつも仲間のために泣いているかのように。そして、彼らが空であるからこそ、創造主の聖霊が彼らを通して動き、人々を祝福し、癒すことができるのだ。もしあなたが彼らに「あなたは薬の人ですか？」と尋ねたら、おそらくこう言うだろう。「私ではありません。私たちはただ祈るだけで、聖霊が薬を持ってきてくださるのです」と言うだろう。彼らからすれば、これは偽りの謙遜ではない。これが聖霊の働きなのだ。皆の祈りの賜物なのだ。

イクチェ・ウィチュハシャとイクチェ・ウィルヤ(単純な男と単純な女)

ラコタ文化の中で、人に対する最高の賛辞は、その人を単純な男、または単純な女と呼ぶことである。この単純という言葉の使い方は、決して知性の低下を意味するものではなく、まったく逆である。素朴な人が自分の内面と完全に向き合い、平穏でいられるような、深い深みと度量のある知恵を意味しているのだ。道教にも似たような考え方があり、最も賢く謙虚な人は、彫られていないブロックの状態に戻ると考えられている。

フランク・フルズ・クロウ、ドーソン・ノー・ホース、ロバート・ステッド、そしてその他多くの人々が見せた謙虚さの深さを目の当たりにした信じられない

ような体験は、このような深いスピリチュアルな存在の体験に近づくためには、どうすれば謙虚さを身につけ、自我を削ぎ落とすことができるのだろうか？これこそが、フールズ・クロウ酋長が「自分自身という最悪の敵と戦う」と語った意味なのだ。

問題点

最悪の敵と戦うことには問題がある。それは、私たちが投げるパンチが私たち自身の腹に落ちるということだ。自己欺瞞や妄想に立ち向かい、それを完全に認識し、悔い改めることも、楽しいことではない。実際、私たちに謙虚さをもたらすこれらのスピリチュアルな修行は、私たちのエゴを打ちのめすため、あるいはできればエゴをなくすために、私たちを辱めることによって行われる。

しかしそれは幻想であり、スピリチュアルなつながりを得ることを喜ぶ部分（エゴの欲望）は、つながりを得る前に完全に死ななければならない部分なのだ。

本物の道は私たちを高揚させるのではなく、私たちを下げ、憂鬱にさせ、最低の人間のように感じさせる。本当に謙虚になるのだ。本物の道を歩むには、無条件の肯定的な評価を持ち続けることが不可欠であり、また、私たちの誰もが、自分の正しさを最高に確信している人と、自分の正しさを疑っている完全に謙虚な人のどちらと時間を過ごすかという選択を迫られたら、常に謙虚な人と時間を過ごすことを選ぶという認識を持って、自分自身を慰めることも必要である。

我々の見方は常に主観的である

「物事をありのままに見るのではなく、ありのままに見る。-アナイス・ニン
周囲の世界を見るとき、私たちは鏡を見ているのと同じかもしれない。

私たちが見ているものは、私たち自身なのだ！

何年前か、あるクリスチャンの隣人が自分の子供たちに、読んでいる文献や見ているテレビ番組を批判的に吟味するように指導していた。私たちの周りの世界に邪悪な影響を見つけることに注意を向けるなら、私たちは必ず邪悪な影響を見つ

けるだろう。悪、あるいは最低でも自分より正しくない存在として認識するようになった周囲の物事や人々に対して、自分が道徳的・霊的に優れていると感じることは、酔いしれるようなものだ。隣人の子供たちとは違って、自分を巻き巻く不義や悪を探し求め、それと区別することに狂信的になる人もいる。自分の周りにある悪を激しく憎み、非難するようになる一方で、自分が見ている悪が、自分の内側に芽生えたものの反映であり、自分の心を優越感と憎悪で蝕み、自分が強力な正義であるかのように感じさせていることに気づかない。

また、善意や愛、無私、自己犠牲、奉仕を思い起こさせてくれる身の回りのあらゆるものや人々に目を向けることも可能だ。もし私たちが目を向けようとするならば、優しさ、慈悲深さ、そして赦しの見本がいたるところにあることに謙虚さを見出すことができるだろう。そのような観察は、私たちに優越感や正義感を抱かせるものではない。むしろ、私たちが目にする顕在的な善意によって心を開き、満たすことによって、私たちに不甲斐なさや不義理を感じさせるかもしれない。

義のパラドックス

正義を感じることに、正義であることには大きな違いがある。実際、両者は正反対だ。正しさ（独善）を感じれば感じるほど、正しさは感じられなくなり、正しさを感じれば感じるほど、正しさは感じられなくなる。というのも、私たちに正義感を抱かせる部分は、自我の妄想だからである。本当に正しい人は、自分の欠点や短所を自覚し、謙虚で悔恨の念を抱いている。信心深いと自慢する客には信用を与えるな、小切手で支払わせるな。現金で支払わせ、請求書を注意深く調べること（本当に信心深い人は自分の信仰を自慢しないから）。

自分の正しさを信じるという甘美で魅惑的な妄想に陥るのを防ぐために、正しさのパラドックスを意識し続けることは、膨れ上がった自我を削ぎ落とし、空気を抜くのに役立つ最も効果的な手段である。 スピリチュアルな旅において、自分自身に対して無条件の肯定的な敬意を払う必要があるのは、自分を素晴らしい気分

にさせるためではなく、罪悪感や自己判断、自己非難に溺れないようにするためなのだ。愛すべき存在であり、愛されていることを自覚しながら、墮落した本性を受け入れる必要があるのだ。

機械（それは私たちである）に「NO！」と言い、その支配プログラムから自らを解放する

スピリチュアルな道では、エゴの妄想を克服する必要がある。また、エゴの基盤であり燃料である動機づけの欲望（潜在的な縄張り意識を含む）を克服する必要がある。これは、私たちが生かし続け、生存と子孫繁栄を助けるために進化した強力な（欲望）・プログラミングに「NO！」と言うことを意味する。機械に「NO！」と言う手段として、他の多くの叡智の伝統に反映されているラコタ族のスピリチュアルな修行のひとつに、断食がある。意図的に数日間、水も食べ物も摂らずに過ごすことで、断食を早めにやめて水や食べ物を取りに行くことができるのだ。

砂漠」を理解し、それを克服する方法

さまざまな宗教（仏教、キリスト教、スーフィー教など）の観想僧や僧侶の多くが、自分自身を"砂漠"と呼ぶ精神的な意識状態に見出した経験がある。エゴを取り払い、祝福を受けることを期待した後、代わりに神やアラーに見捨てられたように感じ、精神的な栄養がまったくないことに気づき、絶望するのだ。この旅にはまだ別のステップがある。コントロール・プログラムに「NO！」と言う別の方法がある。

最高の幸福と最高の喜び

他のどんな幸福よりも高い幸福、他のどんな喜びよりも大きな喜びが存在する。この最高の幸福、最高の喜びを経験するとき、あなたは笑わず、微笑まず、涙を流す。溢れ出る喜びと幸福のために、涙が目に浮かぶのだ。結婚式で人が泣くの

はそのためだ。私たちが愛し、深く思いを寄せる2人が一緒になり、結婚という絆を築く瞬間に立ち会うことは、あまりに完璧で、この経験を改善することはできない。滝の下でバケツを持つようなものだ。バケツはたちまちいっぱいになり、喜びの涙となってあふれ出す。それは完璧で深い平安の状態である。この平安の完璧さは、結婚の儀式に立ち会っている間、余計なものへの欲望が一切なくなったことによる。私たちが感じる喜びと幸福感を少しでも増すような、私たちが望むものは何もないのだ。もし誰かが、結婚式を見ながら楽しめるようにと、私たちの好きな食べ物を持ってきたとしても、それは私たちの関心を完璧な体験から遠ざけてしまうからだ。また、夕日や朝日の美しい景色や雲を眺めるときにも、この最高の喜びを経験するかもしれない。このような美の体験は、この体験を超えるものは何もないほど完璧であるため、私たちの欲望はすべて中断される。ニルヴァーナ」という言葉に意味があるとすれば、このようなまったく欲望のない安らぎと満足の状態に違いないが、結婚式を見るような経験は一時的なもので、とらえどころのない、まったく欲望のないニルヴァーナの状態は永久的なものと考えられている。

欲望の機能

私たちの欲望の機能を理解するためには、その進化的機能を考える必要がある。しばしば思い起こす必要があるかもしれないが、私たち人間は何十億世代にもわたる進化的適応の結果である。私たちは、適応し、生き残り、並外れた成功を収めて子孫を残すようにプログラムされた、最高級のサバイバル・マシンなのだ。生存マシンとして成功するためには、生存と子孫繁栄を確実にするためなら、どんな行動でもする気になる必要がある。そこで私たちの欲望が登場する。食糧不足の絶望的な時代には、豊富な食糧と水の供給を得たいという欲望が生存動機となり、暖かさ、風雨からの避難所、安全を得たいという欲望が生存動機となり、愛、交友、性的快楽やオーガズムの満足を求める欲望が種の生存動機となることは容易に理解できる。社会的な富と権力が調整された階層では、最も富と権力

を持つ者は、適切で望ましい伴侶を見つけ、子孫を残し、自身と家族にとってより高いレベルの安全と安心を得る可能性が高いと**認識される**。

欲望の重荷

私たちが喜びや幸福を欲望と結びつける傾向があるのは、欲望の対象を達成したり手に入れたりしたときに感じるであろう喜びや幸福を予期しているからである。もちろんこれは、欲望の対象を積極的に求める動機付けとなる。私たちのプログラミングは、欲望、喜び、悲しみに私たちが動機づける。私たちはロバに馬車を引かせるようなもので、ロバの運転手は私たちの目の前にジューシーで甘いニンジンぶら下げている。私たちはニンジンに手を伸ばしながらカートを引っ張り、目的地に到着してニンジンでご褒美をもらうが、ニンジンを口に含んで味わっていると、また別のもっと大きくて甘いニンジンが目の前にぶら下げられ、出発する。この動機づけとなる欲求システムの問題のひとつは、進化が私たちに、お腹がいっぱいになってもう十分だと認識する準備をさせてくれないことだ。こうして私たちは、特別に裕福で安全な億万長者が満足できず、必死に億万長者になろうとしている姿や、億万長者がその莫大な富を全人類の向上のために捧げることで愛される英雄になるのではなく、純粹に政治力を高めて自分たちをさらに富ませるために、政府を操作しようとするためにその富を使う姿を目にすることになる。彼らが死ねば、世界は安堵のため息をついて「おさらばだ！」と言うだろう。彼らは、彼らを完全に軽蔑していなかった少数の人々以外には悼まれることもなく、極端な精神の貧困と愚かさの例として以外には、すぐに忘れ去られるだろう。彼らは、労働者を困窮させ、最低限の賃金しか払わず、福利厚生もほとんどないことで自分たちを豊かにするような人々なのだ。

また、優秀な労働者を雇い、福利厚生付きの完全な生活賃金を支払い、需要の高い人気のある革新的な製品を生み出すことによって裕福になった億万長者もいる。大成功を収めた億万長者の中には、その莫大な財産を全人類の向上のために使う者もいる。彼らは祝福されるべき存在であり、英雄として賞賛されるのは当然である。

プレゼント

"足るを知る者は富む"-老子、『道経』第33章

ネイティブ・アメリカンの部族には、ギブアウェイの儀式（太平洋岸北西部のチヌーク族のジャーゴン語ではパトラッチまたはポトラッチと呼ばれる）の伝統があり、最も成功したアルファオス同士が、誰が最も多くの富を手放すことができるかを**激しく競い合った**。最も社会的地位が高く、最も愛され、尊敬される人物は、家も背中の衣服以外もすべて手放し、再起できるまで親戚の家に身を寄せた。私たちがアルファと呼ぶ人々の中には、並外れて勤勉で、非常に成功することに意欲的で、しばしば非常に競争力のある人がいるという事実は、社会が彼らの精神を尊重し、コミュニティ全体に利益をもたらす豊かな成功の方法を提供し、その過程で彼らの勤勉さと成功を完全に称える方法を知っている場合には、特に良いことである。

ラコタ族の酋長シッティング・ブルは、ある白人ジャーナリストから、なぜ民衆から愛され、尊敬されているのかと尋ねられたことがある。白人の間では、馬や家をたくさん持っているから尊敬されるのではないのですか？と尋ねると、記者は「その通りだ」と答えた。そしてシッティング・ブルは、彼が自分のために何も持っていないからこそ、人々は彼を愛し、尊敬しているのだと言った。

先住民のガイドに居留地を案内された白人の人類学者が、部族で一番の金持ちは誰かと尋ねたところ、何も持っていない男を紹介された。困惑した人類学者はガイドを横に連れて行き、「いや、私が言っているのは本当にお金持ちという意味なんだ。先住民のガイドは言った。彼は金持ちじゃない。

先住民の部族では、恵まれない人々の世話を最もよくする者に最高の社会的地位と尊敬が与えられていたため、部族の富は一部の者の手に**停滞することなく**、再分配され、流れ、循環し続けた。この**倫理観が**、富める者から貧しい者に至るまで、**社会全体に安全と安心を**もたらすことで、部族は富の**重要性を軽視する**ことができ、誰もが十分な富を持ち、これからも十分な富を持つことができ、**誰もが**

豊かであることを知っていた。部族内の貧富の格差は依然としてあったが、最貧困層は、自分たちは安全であり、必要なものは満たされ、飢えを恐れる必要はないことを知っていた。まれに食料が不足することがあっても、部族全員が平等にそれに直面した。そのような災難は最貧困層だけに影響するわけでもなく、最貧困層が部族の誰よりも影響を受けるわけでもなかった。

伝統的な部族の生活様式は、イエスの黄金律の教えを完全に受け入れ、体現している。これは、ヨーロッパ人がアメリカ大陸に侵入し、イエスの黄金律に関する教えを持ち込むずっと以前から、先住民の部族文化の永続的な部分であった。ローマ人への手紙2章14節（欽定訳）でパウロはこう書いている。"律法を持たない異邦人が、生まれながらにして律法に含まれていることを行うとき、律法を持たないこれらの人々は、自分自身が律法なのである。**侵略者ヨーロッパ人が犯した悲劇的な過ちは、自分たちが先住民族よりも技術的に優れているから、先住民族よりも精神的にも優れていると思い込んでしまったことだ。これほど真実からかけ離れたことはない。**

イエスの教えを単なるスピリチュアルなアドバイスではなく、私たちが種の進化に向かわせるためのアドバイスとして受け止めるなら、人類という種の進化における次のステップは、最も貧しい人々が飢えや死を恐れる必要がないように、社会の中で共に生き、互いに支え合うことを学ぶことだとわかるだろう

自分たちと同じように飢えている人々に食糧を供給できる力と技術を持っていながら、それを選択しないのであれば、どうして自分たちを「善良な人々」だと思えることができるだろうか？

肌の色も言葉も習慣も違うかもしれない、遠く離れた土地や大陸の飢餓に苦しむ人々は、どこか私たちとは違う。私たち全員が知っているが、思い出したくないのは、飢餓に苦しむ親たちが、自分の子供たちが飢えているのを見て心を痛めているということだ。この親たちが子供たちに望んでいることは、まさに私たちが子供たちに望んでいることだ。彼らが成長し、懸命に働き、成功し、いつか自分

の子供を持つことを望んでいるのだ。肌の色が青だろうが、緑だろうが、紫だろうが関係ない

平和への挑戦 - グローバルなポトラッチ？

「私たちの学校が必要な資金をすべて手に入れ、空軍が爆撃機を買うために模擬店を開かなければならなくなったら、それは素晴らしい日になるだろう」-女性国際連盟

1965年頃の平和と自由のポスター

世界の最貧困層が餓死することがないようにするために、**どの国が本当に最も特別**で、国家間で最も尊敬に値するかを、国家間で世界的なポトラッチを行うべき時なのかもしれない。これは貧富の格差をなくすことではない。世界の最貧困層**が、生きていくのに十分な生活費を確保し、今後も十分な生活費を確保できるという安心感を得られる**ようにすることである。また、初歩的な医療を提供し、文化的に適切な教育を受けられるようにすることで、最貧困層が勉強と勤勉さによって貧困を克服できるようにすることでもある。すべての人に、明るい明日を夢見る機会が与えられるのだ。

このような挑戦はコストがかかりすぎると言う人もいるだろうが、軍隊を食料の後方支援に再利用できることを考えれば、人を殺すよりも食料を供給する方が安上がり（そしてはるかに満足感が得られる）であることは間違いない。世界の国々が、互いに対立したり、利用しようとしたり、戦争したりするのではなく、互いに助け合い、支え合うことを理解すれば、もはやどの国も、排外主義的な軍国主義や戦争マシーンを必要としないことは明らかだろう。平和が支配し、互いを養い支え合うことで成り立つ経済は、軍事経済や防衛経済よりもコストがかからず、はるかに効率的で豊かで安全なものになるだろう。

貧しい人々の世話はさまざまな慈善団体に任せるべきだと言う人もいるだろうし、自分たちの税金がそのような目的に使われることに反対する人もいるだろう。自分たちの税金が人々を養うために使われることには反対するのに、自分たちの

税金が人々を殺すために使われることには反対しないのはなぜだろう。彼らの心の中には、悔い改め、手放し、赦されるべき恐怖があるのかもしれない。

私の国（アメリカ合衆国）の多くの政治家たちは、「アメリカの例外主義」や、アメリカがいかに素晴らしいかを自慢したがる。確認バイアス（Confirmation Bias）は、政治家たちがアメリカの素晴らしいところを見る一方で、彼らが是正するために選ばれた**歴史や現在の**不名誉で恥ずべき部分を都合よく無視する能力に拍車をかけている。地球上で最大の軍隊（この努力のために再利用できる）を持つ非常に裕福な国が、他の裕福な国々にこの努力に参加するよう促しながら、世界中の飢餓をなくすために世界をリードする最大の能力を持つことは明らかだろう。真に例外的な国であれば、このような平和への挑戦をリードする機会に飛びつくだろう。

十分なものを持っていると知っている人は豊かである。

-何度でも言う！

進化は、目の前にぶら下げられた次のジューシーなニンジンに「NO!」と言う方法や、すでに持っているニンジンに完全に満足して、欲望のない平穩の中に座っている方法を教えていない。私たちのバケツは滝の下で溢れかえっているが、それだけでは十分ではない。私たちは「オフ」のスイッチを見つけ、欲望を刺激するプログラムをオフにして、満足の中で休息する必要がある。私たちには十分な知性があり、遺伝的に受け継がれた体内プログラミングに頼らずとも、自分の生存欲求や子孫繁栄に関心を向けることができる。プログラミングから一步踏み出し、次の光り輝くニンジンを拒絶する能力は、自分の腹の中にはニンジンがいっぱいあり、**自分には十分な**ニンジンがあるとわかっているからこそ、私たちを豊かにし、満足と平安をもたらすのだ。前述したように、結婚式で泣きながら、その幸せが最高の幸せであることを引き起こすのは、欲望がまったくないからである。このことをよく考えてみると、私たちの欲望は私たちを幸せにするためにあ

るのではない。欲望は、プログラムされた欲望の対象（少しばかり手が届かないが）を手に入れたときに得られる幸福の増大を期待させるためにあるのだ。私たちの欲望は私たちを動かすためにあり、過度に成功した、したがって不必要なプログラミングに従って私たちを動機づけるためにあるのだ。

それでも、私たちを誘惑し、やる気を起こさせ、生きる目的や期待する幸福を与えてくれる、手が届きそうで届かないニンジンが目の前にぶら下がっていないこともある。ニンジンがないとき、あるいはニンジンが絶望的に手の届かないところにあり、楽しみや期待するものが何もないとき、私たちは必死になるかもしれない。私たちは、自分の人生に意味と目的を与えてくれる、追い求めるべき目標（ジューシーなニンジン）が必要だと考える。それがなければ、無軌道で絶望の淵に立たされるかもしれない。

絶望

「...私たちは働き続け、光を待った、

肉も食わず、パンを呪った；

そしてリチャード・コーリーはある穏やかな夏の夜

家に帰り、頭を撃ち抜いた。-エドウィン・アーリントン・ロビンソンの「リチャード・コーリー」。

ロビンソンの詩は、若く、ハンサムで、健康で、この上なく裕福で、成功した男が自ら命を絶つというものだが、これは、われわれの生存プログラミングが、その機能の目標が完全に達成されたときにそれを認識するメカニズムを進化させなかったことを示している。こうして、追い求めるべきニンジンが尽きたり、欲望の対象が絶望的に達成不可能になったりすると、生活が安定し、生存や将来の成功の見込みが何ら脅かされていないにもかかわらず、すぐに達成可能な目標がないために、完全に絶望してしまうことがある。次の甘いニンジンを追い求めても、どこにもないのだ。

ナイジェリアの小銭入れをもらった) 21歳の誕生日を迎える前、私はセントルイス大学の寮に住んでいた。彼女は私と別れて出て行き、私は打ちのめされた。(私は彼女と結婚したかったのだが) 私は、これまでの人生で感じたことのないような、深くひどい絶望の中にいた。プリンストン大学で心理学を専攻していた友人のエドが私を訪ねてきて、単に礼儀正しい会話をしているのではなく、彼が本当に知りたがっていることがわかるような言い方で、私がどうしているかを尋ねてきた。私は彼に、自分が完全に絶望していること、そしてその理由を話した。彼がくれたアドバイスは思いがけないものだった！彼はこう言った！今が絶望のときなら、絶望に溺れそうなときに、それと闘って幸せへの道を切り開こうとするのではなく、絶望の中にもっと深く入ってみることだ。もっと落ち込むようにしなさい。もっと沈んでみるんだ」。エドはソレン・キルケゴールのエッセイ『死に至る病』に触れ、絶望は死に至る病であると述べた。絶望は、それ自体は致命的な状態ではない。私たちの存在のあらゆる部分が、どこか別の場所に、何とかして別の場所に、あるいはまったくどこにもいたくないと思っている。それは、私たちのサバイバルマシンの部分が、たとえどんな行動が私たちの気分を良くし、私たちに利益をもたらすかもしれないのか見当もつかないにもかかわらず、救命や生命を守る行動をとるよう動機づけるために、負の強化を用いているのだ。もし食べ物がまったくなくなったり、凍えるような寒さの中で外から出られなかったりしたら、生存の可能性を高めるために何をすべきかがわかるだろう。私たちは、過剰な成功を経験しながらも、欲求不満に対処する方法を進化させてこなかった。エドが提案したのは、**絶望することを望むことを選択することで**、動機となる欲望を短絡させる手段だった。緊張感や他のものへの欲求を放棄し、代わりに絶望を望むことを選択することは、死に身を委ねるような感じがした。エドは私に、内蔵されたサバイバル・プログラミングに「NO!」と言う方法を教えてくれたのだ。私はエドの心理学の深い知識を信頼していたので、他の場所にいたいという願望を手放し、**もっと低いところに行きたい**と願ったり、もっと落ち込もうとすることに集中した。不安と苛立ちの副産物である身体の筋肉の緊張を手放

すことができたので、最大不愉快な量になると予想していたことにリラックスした。私が経験していたすべての痛みと不快感は、幸福への道を切り開くことができないうことに対する極度のフラストレーションが生み出していたことに私は驚いた。私はまだ絶望していたが、それは私が望んで望んでいて自分自身に確信させたものだったので、それはもはや少しも苦痛ではなかった。幸せへの道を切り開こうと必死になっていた不安は完全に消え去り、私は**絶望を望ましい経験に変える**方法を本当に学んだのだ。その過程で私は、私というサバイバルマシンの動機づけメカニズムを一時的にショートさせ、オフにしたのだ。私が驚いたのは、望ましくないものを望むことを目標として選択し、それによって欲望=動機づけのメカニズムをショートさせたことで、私は二人の愛する人の結婚に立ち会ったときに経験する涙に最もよく似た状態に置かれたことである。それは深い平穩の状態であった。望むものは何もなかった。

絶望を完全に受け入れることで、絶望を打ち消すことができず、それでもなお、自分のカートを動機となるエンジンがないことに気づいている人たちには、この問題に対する別の解決策がある。困っている人やグループを見つけ、その困窮を克服する手助けをするのだ。彼らのニーズとその解決を、あなたの新しいエンジンにしよう。

これらはすべて、私の**21歳**の誕生日（ナイジェリアの小銭入れをプレゼントされた日）の前に起こったことだ。

それ以来、絶望の淵に立たされたとき、私はそのフラストレーションを迂回し、その中に身を沈め、深く深い平安を感じるようになるようになった。それは、私の平均的な、活動的で、忙しく、欲望に満ちた意識状態よりもはるかに平和な、心地よい場所である。この能力によって、私は絶望の中にいる人と一緒に座り、関わり、絶望の経験を痛みなく分かち合うことができる。

自殺 - 健康的な方法

プリンストン大学で心理学を専攻し、サイキックでもあった友人のエドは、自殺願望は実はとても健康的なもので、体を傷つけないようにすればいい、とよく言っていた。彼が言いたかったのは、人が自分の存在を終わらせたいと感じるとき、本当に捨て去りたいのは、欲求不満、痛み、不幸のすべての元凶であるエゴであり、そのときこそ、完全に沈黙して座り、エゴが死ぬのを許し、（身体を傷つけるようなことは何もせずに）精神的に非存在へと飛躍するときなのだ、ということだった。ラコタ語の *hanjbléčeya* は「ビジョンを求めて泣く」という意味であり、自分の存在を手放す準備ができている人の涙は、まさに「丘の上に行く」ときに求められるものである

丘の上に行くための教え

ゴーイング・オン・ザ・ヒルについて、私には3つの教えがあった。

4つのことを期待する

セロ・ブラック・クロウは言った、「丘の上に行くとき、私たちは4つのことを期待する：

第一に、丘の上で死ぬことを期待する。

そしてそのエゴの死は、肉体の死と同じくらい恐ろしく、最終的なものだと感じている。

そして、セロは言った。"私たちが期待している2つ目のことは、私たちが気が狂ってしまい、断食が終わったときに彼らが私たちを捕まえに来たら、残りの人生を精神病院に入れなければならないということです。

丘の上で断食するときは、心のコントロールを手放し、神や聖霊にコントロールを委ねる必要があることを学んだ。コントロールを手放すとき、これは狂気によ

うに感じられるかもしれないが、コントロールを必死に保持しようとする部分（エゴ）は、狂気のように感じられても、手放す必要のある部分なのだ。自分の外（そして自分のコントロールの及ばないところ）に注意を向けることが助けになるだ。

セロは続けた。「私たちが期待している3つ目のことは、姿を消すことです。彼らが私たちを捕まえに来たとき、私たちは消えているか、あるいは骨が少し残っているかもしれない。これも起こったことだ"

精神的に完全に沈黙し、エゴを手放した状態では、目の前や周囲に非実在や空虚が形成され始めるように見えるかもしれない。そして、その暗い空虚が非実在であり、私たちが知っている生命や存在の死であると認識するかもしれない。その瞬間の私たちの義務は、その空虚に足を踏み入れ、跳躍し、存在しなくなることを自ら意志することである。その空虚は、まさに私たちの希望と欲望のすべての死なのだ。それは、私たちが創造主に自分自身を返す方法であり、私たち自身に姿を消す方法なのです。この状態に到達できるのは、私たちが自分自身に言い聞かせ、社会が私たちに伝えている妄想をすべて完全に打ち壊したときだけです。自分を良く思い、自分の人生に価値を見出すのに役立つすべてのもの（考えや思い込み）を完全に空っぽにしなければならないのです。

結論として、セロは言った。"そして、我々が期待しているのは、丘から下りてくることだ"。

彼らに "NO!

ピート・スウィフト・バードは言った。「ペストよ、丘の上に行くとき、モグラが近づいてきて『あなたにプレゼントがあります』と言ったら、『**NO!**』と言いなさい。バッファローが近づいてきて『あなたに薬があります』と言ったら、『**NO!**』と言いなさい。これらすべてに**NO**と言い、神のために耐え忍びなさい!"

イエスが断食したとき、誘惑に遭い、誘惑者を拒絶して「汝を私の後ろにつかまえよ！」と言ったとき、誘惑に打ち勝ち、神の祝福を受けたことを思い出すまで

は、これは奇妙なアドバイスに思えた。そして、シッダールタ・ゴータマがボの木の下に座ったとき、彼はマーラの誘惑に遭い、誘惑を拒絶したとき、彼は目覚めた仏陀となった。私たちは何かを得るため、何かを達成するために丘に登るのではありません。創造主の聖なる魂に導かれるために、自分を手放すために丘に行くのです

5分間

愚かなカラスじいさんは言った、「丘の上に行けば、5分もいれば彼らがやって来る。腹が減っていようが、喉が渴いていようが、疲れていようが関係ない。重要なのは、どれだけ彼らを受け入れる準備ができているかということだ」。

数日間、食事も水もとらず、1つの場所に立ち続けることは、心を開き、スピリットの導きを受け取る準備を整えるのに役立つが、人が完全に心を開き、ビジョンを受け取る準備ができているなら、それがいつ、どこで起こるかは問題ではない。公衆トイレの便器に座っているときに、神の愛の啓示と聖なるビジョンを受け取った女性の話を聞いたことがある。公衆トイレの便器に座っているなどという、私たち人間が不快に思うような状況は、神の聖霊にとってはまったく無意味なのだ。エゴを完全に手放し（言うほど簡単なことではないが）、すべての考えを静めて、聖霊を受け取るために自分自身をオープンにすれば、どこにいても、何をしていても、聖霊はやって来る。

アイデア、理解、描写、言葉の奥にある現実

アイデア、理解、描写、そして言葉を超越した部分を、言葉やアイデアで表現することへの挑戦である。丘に登ったときにできる最も重要なことは、言葉や描写の下にある深遠な現実を知覚するために、描写の世界を手放すことだ。思考を沈黙させ、内的な対話を断つと、定義によって構築された現実が崩壊し、通常の現実認識に亀裂が入る。私たちがその存在を隠してきた自分自身の一部が顕在化するのだ。私たちの仕事は、自分自身のその部分に身をゆだねることだ。なぜなら、言葉やの記述で構築されたエゴ意識が、私たちの知っているすべてだからだ。

だから、それを死なせるとき、それは私たちの存在全体の死のように感じられる。それはいいことだ！エゴに飲み込まれよう！

注意を払う

丘に行くときに犯しかねない過ちがある。そのひとつは、耳を傾け、注意を払うべきときに話してしまうことだ。満杯の器では、受容することはできない。祈りには2つの形があり、1つは創造主に向かって大声で、あるいは心の中で語りかけるものであり、もう1つは、すべての言葉を手放し、思考を沈黙させ、心を開いて耳を傾けるものである。丘の上に行くときは、創造主がまだ知らないと思っている言葉、意味、理解だけを話せばいいのです。"創造主がまだ知らないと思っている言葉、考えていることは何ですか？"と仰うことです。注意を払うとは、何よりもまず、注意を内側に向けるのではなく、注意を外側に向け、自己認識を手放すことです。私たち人間は、生存機械であるようにプログラムされている。食べ物も水もない状態が1日や2日続くと、私たちの内部プログラミングは欲望を通して、喉が渴いている、お腹が空いている、すぐに水と食べ物を探しに行くべきだと叫び始める。私たちのプログラミングに「NO!」と言い、水や食べ物を求める欲求を無視するには、強烈な意志の働きが必要だ。注意を外側に向けるとき、一つの要素に気づいて集中するのではなく、視野全体を包含するように注意を広げるべきである。草の葉や雲に注目すれば、「草の葉」「葉」「雲」と考えることになる。禅宗の教えに「象のことを考えるな!」というものがあるが、「考えるな」と言われなければ象のことを考える気などまったくなかったにもかかわらず、私たちは象のことを考えてしまう。この教えは、私たちが静寂の中に座ることによってそれを静めることを学ばない限り、私たちがコントロールできない「猿の心」と呼ばれるものを示している。ラコタの伝統では、丘に登る人はほとんど必ず聖なるパイプを持っていく。セイクリッド・パイプは（狩猟用の矢とは対照的に）方向を示す矢のようなもので、（あらゆる方向に存在する）創造主を指し示してくれます。

量子力学的説明

現実を支配する科学的ルールだと思っていたものが破られるのを何度も目の当たりにし、私は現実の本質に対する理解と科学的定義を広げる必要があることに気づいた。私のスピリチュアルな理解と科学的な理解を調和させるために思いついた理論は、現実の量子力学的な性質に関係している。とても奇妙なことに、私たち人間のエゴは、**、私たちの言語と結びついた、私が俗に言う魔法のような効果を持っていると信じている。** その強固さは、言語構造、創造された記述、概念、理解によって構築され、維持されているのであって、現実の本質ではない。

量子力学は、光が粒子なのか波なのかを見極めようとする現実の性質を扱っている。古典的な二重スリット実験は、私が俗に魔法効果と呼んでいるものに関連する証拠を提供している。

かなり幅の広い垂直スリット1本にレーザーを照射すると、スリットがレーザー光のビームと干渉しないため、スリットの反対側の壁（またはターゲット）にレーザー光のドットが見える。スリットの隙間を狭くしていくと、回折として知られる性質が作用し、点が小さくなる代わりに光が散乱し始め、ウィキペディアの優れた[二重スリット実験のページ](#)にあるこの写真に見られるように、しっかりとした主帯域の両側に非常にぼんやりとした光の側帯域を持つ、横に広がった光線が見えるようになる：

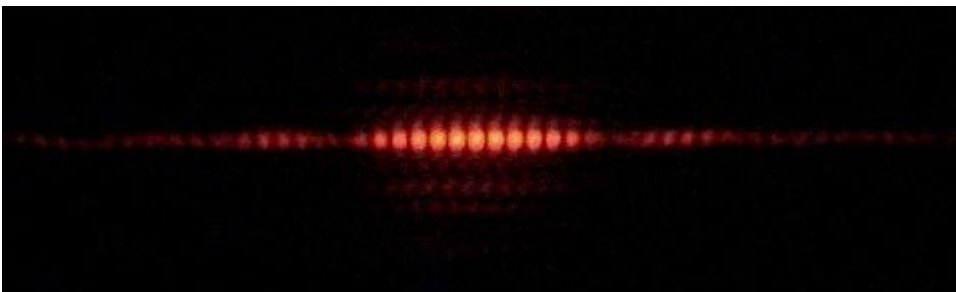
シングルスリットパターン



Jordgette, CC BY-SA 3.0 <<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>>, via Wikimedia Commons

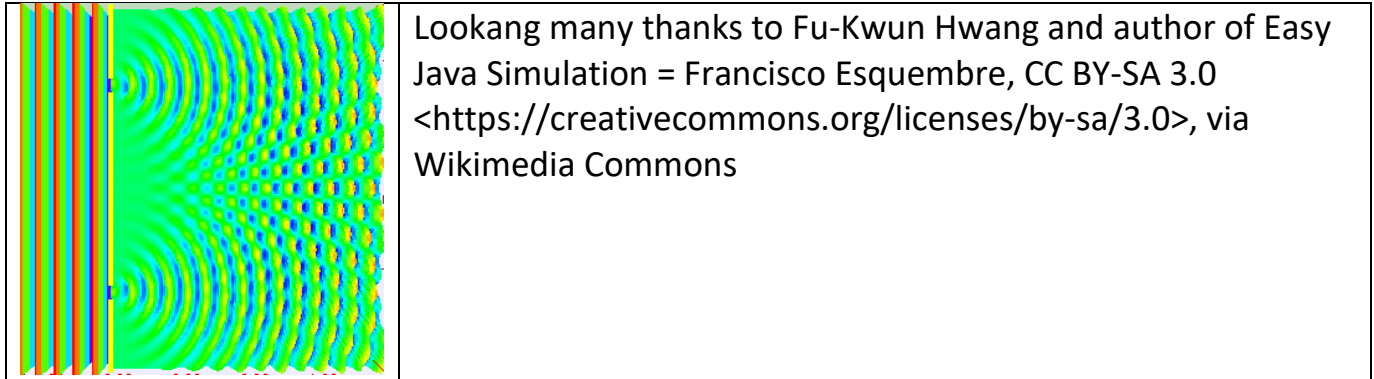
スリットを2つ並べて極端に接近させ、両方のスリットに同時にレーザーを照射すると、それぞれのスリットからの散乱光の波の性質によって、2つの波のピークが2重に明るい部分を作り、2つの谷が合わさると同じように2重に明るい部分を作る干渉パターンが生じるが、ピークと谷が合わさったところでは互いに打ち消し合い、このような絵になる：

ダブルスリットパターン



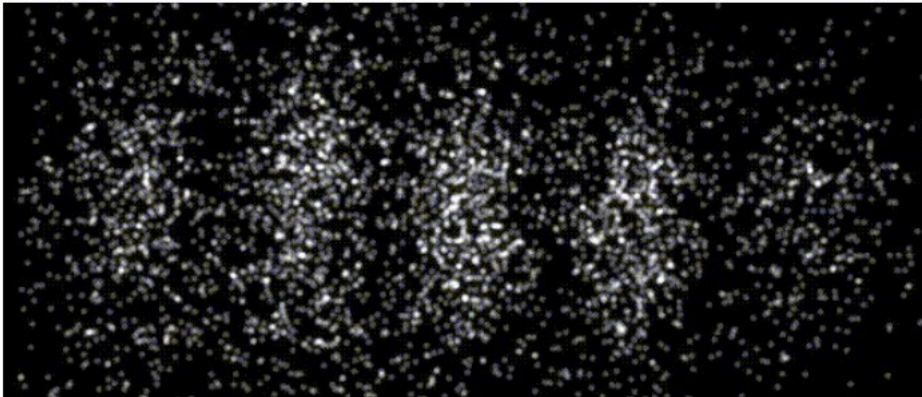
Jordgette, CC BY-SA 3.0 <<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>>, via Wikimedia Commons

ここに、干渉パターンがどのように生成されるかを示す図がある（ウェブページでは、この図がアニメーションで表示される）：



(写真はすべて [ウィキペディアのダブルスリット実験のページ](#)より)

一度に1つの光子だけを二重スリットから発射し、それぞれの光子が標的のどこに着弾したかを記録し、さらにその着弾を何度も積み重ねると、光子の着弾パターンは、あたかもそれぞれの光子がそれ自身と干渉しているかのように、我々が見



Roger Bach, Damian Pope, Sy-Hwang Liou and Herman Batelaan 参照 Roger Bach et al 2013 New J. Phys. 15 033018 DOI 10.1088/1367-2630/15/3/033018, CC BY 3.0 <<https://creativecommons.org/licenses/by/3.0/>>, via Wikimedia Commons

た干渉パターンを依然として示していることがわかる

さらに奇妙なことに、この実験は電子で繰り返され、一度に一個の電子を二重のスリットから発射した。

干渉パターンこの実験は、全原子、分子、さらには2000個もの原子を持つ複雑な分子でも行われ、同じ干渉パターンが時間とともに出現した。

複雑な分子が粒子としても波動としても存在するのであれば、**私たちも粒子としても波動としても存在するはず**であり、おそらく私たちの言語が作り出した自我意識が、私たちを取り巻く世界の経験を、固体の、粒子をベースとした、あるいは粒子が知覚する現実限定しているのだろう。これは、ニールス・ボーアとヴェルナー・ハイゼンベルクのコペンハーゲン解釈と一致する。コペンハーゲン解釈の優れた要約は、PBSのビデオ「[現実を破った量子実験 | 時空間](#)」にある。

「コペンハーゲン解釈によれば、物理システムは一般に、（自我意識によって）測定される前には明確な性質を持っておらず、量子力学（）は、測定が特定の結果をもたらす確率を予測することしかできない。自我意識が測定を行う] という行為は系に影響を与え、測定直後に確率の集合を可能な値のうちの1つだけに減少させる。この特徴は波動関数の崩壊として知られている。”ハイゼンベルクは、これを”波動関数の崩壊”ではなく”波動関数の減少”と呼ぶことを好んだかもしれない。

おそらく、フルズクロウ酋長のようにエゴを消し去り、言語によって構造化された現実を超越することができる者は、粒子と波動に基づく現実の両方と対話し、知覚することができるのだろう。ということは、おそらく私たちの言語による限定されたエゴ意識が、私たちを粒子状の現実に縛り付けているのだろう。その証明には、一般的に共有されている、言語によって構造化された現実の改竄が必要である。しかし、宗教的現実と科学的現実の両方を、それぞれの真実と完全性を維持する方法で説明する首尾一貫した手段を提供する。おそらくそれは、オッカムのウィリアムのカミソリのテストも満たすだろう。(必要以上に実体を増殖さ

せるな」、あるいは一般的に「他の条件がすべて同じなら、最も単純な説明がおそらく最良である」と表現される)。)

著作権

ラコタ族のメディスン・ピープルの倫理的な教えのひとつに、「創造主が無償で与えてくれるものは、決して金銭を請求してはならない」というものがある。メディスン・ピープルの誰一人として、自分がヒーリングした人に対して、あるいは儀式に参加したり参加したりすることに対して、料金を請求することはなかった。

その倫理的指針に則り、私はこれを書籍として出版する代わりにウェブページとして公開した。

私がこの作品に著作権を設定したのは、私の原著作者であることを証明するため、この作品を国会図書館に登録するために提出するため、そして私がこのウェブサイトには書いた文章を、いかなる制限もなくパブリックドメインとして公開する権利を保持するためです。**私**がこのウェブサイト（またはこの.PDF）に書いたものは、クリエイティブ・コモンズCC0 1.0として指定しました。営利・非営利を問わず、誰でも、その全部または一部をコピーすることができます。このウェブサイトには、ウィキペディアの写真など、クリエイティブ・コモンズ独自の制限やその他の制約があり、私が作成したコンテンツの無制限公開の対象外となるものがあります。私はこの作品をウェブサイトとして、また.PDFファイルやオーディオブックに似たMP3やM4Aファイルとして公開するつもりです。このウェブサイトのミラーを作成したい人も、ぜひそうしてください。

私は、このウェブサイトの一部または全部をコピーして配布し、出版することを許可するだけでなく、ここで共有されている考えやアイデアを、私がこの文章で何とかした以上に、人々がよりよく理解し、より雄弁に、説得力を持って伝えてくれることを望んでおり、感謝の気持ちを込めて、そのような人たちを励ましたいと思っている。

ミタクイエ・オヤスシ・14B

-プレストン "Pñ" モーザー
phesto@liberation.org

©Copyright 2025 by A. プレストン・モーザー, **No Rights Reserved.**